

第十二章 植物・動物

(一) 函南町の自然

函南町は富士、箱根、天城などの火山群の中にあり、大部分が火山性の山地で多賀・湯河原・箱根・富士等の各火山の噴出物が堆積したもので、表土の大部分はその火山灰である。

一方平野部は来光川、柿沢川、また本流としての狩野川の沖積土からできていて、肥沃な水田が広がり、田方平野の重要な穀倉地帯となっている。

地形は箱根外輪山の一部である鞍掛山（一、〇〇四・二メートル）や日金山（七六五・九メートル）、玄岳（七九九メートル）を結ぶ背梁山脈は神奈川県との境になって分水嶺を形成している。

この山脈の西側を丹那断層が走り、田代・丹那の盆地をつくり、その周辺の地域は東部山岳地帯となっている。山岳地帯には二二三ヘクタールの原生林があり、その周辺の原野は、戦前まで農家の茅（屋根の材料）や家畜の飼料の草刈場となっていたが戦後針葉樹が植林され、今では立派に成長して樹海となっている。

気候は山岳地帯を除き、年平均温度摂氏十五度、降水量は年一、九〇〇ミリで概ね温暖であり、町内には温泉も湧き、秀峰富士や天城、箱根の山脈が一望でき、田園地帯をコサギが舞い、夏は螢が飛び交う、緑多い自然に恵まれた住み良い処である。

(二) 函南町の自然の変遷

最近この地域でも多くの遺跡が発見され、古代からの歴史の流れの一部が少しずつ解明されるようになった。本誌「上巻」には既に近世の様子がかなり詳しく書かれているので、少しさかのぼって遺跡や分布する植物を手がかりに、移り変わってきた函南町の自然をたどってみることにする。

田方平野は、今から数千年前は現在の水田の表面よりも十数メートル低いところにあり、波静かな海であった。日守の山々は海の向こうにあり、塚本は島として浮かび、遠く富士山は未だ噴煙を上げていた。

今から一万年位前の沖積世の初期に、山地の沈降が一斉に起きて、駿河湾の海水が田方平野に入り込んだ。大仁付近まで海水は入り込み各地に入江をつくり、この入江の沿岸や島々は藪蒼としたタブ・シイ・カシ類を主とした暖帯林におおわれていた。

やがて沖積作用が始まり、山岳地帯から大量の土砂が流されるようになり、海はだんだん埋めたてられていった。埋めたてられた所には沼沢地ができ、そこに葦が生え、田方平野は一面の葦原となり、干上がった所には森林が徐々に伸び出していった。その間をうねるように絶えず川筋を変えながら狩野川はできた。

当時の当地方の気候は現在よりずっと温暖で、木の実などの食料も豊富だったので、この地方に人が住むよう

になったのは、縄文時代の比較的早い時期ではなかったかと思われる。

箱根山の西斜面に住みついたごく僅かな人達はシイ・カシ・クリ等の木の実や、クズ・ワラビ・ゼンマイ・ヤマモ等の根や茎を食料とし、これらの植物の繊維を衣料として身にまとい、狩猟生活をしていた。

箱根や玄岳の山々も現在の山容とはかなり異なった山容をしており、来光川や柿沢川の谷も今程深くはなく原生林におおわれていた。その後、年が経つにつれ、人口も次第にふえていき、あちこちに集落が作られ、ヒエやアワを作る農耕から水田農耕を主とした弥生式農村の風景がみられるようになった。

最後の堆積が進行した千数百年間こそは、原始の植物に徹底的な人為的変貌をもたらした時代であった。葦原は次から次へと水田と化し、取り残された沼沢地も埋められ、山林は伐採され、あるいは野火に焼かれ、手の届く限り開墾されていき、現代に近づくに従って加速的に進行したのである。

このような人為的変貌とは別に、自然的条件の変化に伴って、沿岸性の樹種や草木の多くがとうの昔のものと交代して姿を消してしまった事は勿論である。

しかし全部が交代してしまっただけではなく、原生林はその当時のままであるし、神社の社叢は禁伐区域として、又人の手の加えることのできなかった岩山や崖地には当時のままの植物の一部をみることができる。

(三) 函南町の自然保護

昭和八年に伊豆箱根鉄道株式会社により箱根峠十国峠間の自動車専用道路が完成し、当地方の観光開発の幕明けとなったが、間もなく支那事変、第二次世界大戦に日本は突入して開発は戦後の復興期まで中断された。

戦後、昭和三十年頃から日本の経済も立ち直り、復興も顕著となり、箱根山の観光開発が再び始まった。その余波は当町にも及び、十国峠にケーブルカーや展望台が、文大駐車場も作られ(昭和三十一年)、熱海峠く大仁町間のスカイラインの完成(昭和三十七年)、引き続き鞍掛山のゴルフ場、富士箱根ランドの建設など観光開発は急速に進み、その開発は原生林にも及び始めた。

一方町内においても人口増加に伴い、住宅地は急速に開発され、ゴルフ場や別荘地の開発、熱函道路の開発など所によつては昔の面影を留めない程に変貌した。

町の発展とは裏腹に開発により多くの自然が失われたばかりでなく、高度経済成長により生活は豊かになったが、自然を大切にする心は次第にうすれいく傾向が全国的に広がり、特に観光地における自然の荒廃を憂慮する声は次第に高まった。自然保護団体の主張する自然保護と、経済優先を主張する地方自治体とはその発展をめぐる各地で問題を提起した。

当時(昭和四十年)函南町農協組合長であつた中村博夫(現町長)は、特に先祖伝来の原生林の荒廃を憂慮し、その保護対策について町民自らが、かけ替えない町の財産である原生林を知り、町民自らが保護する以外に方法はないと、昭和四十三年、「箱根山を愛する会」を結成した。以後毎年禁伐林の動植物を見る機会を設け、町民に参加を呼びかけた。

この観察会は、毎年八月上旬に催され、本年で一七回めを迎え、本年も百余名の参加者があり、町外からの参加者も年毎に増加している。

又昨年七月には、東京農工大名誉教授中村克哉氏、日本大学助教授安原健允氏等学識経験者及び県の行政機関、箱根山組合の関係者によつて、実地検分がされた。更に今後の禁伐林のあり方について検討会が設けられ、意見

交換がなされた。

その際学識経験者から、

「禁伐林は天然記念物に該当する大ブナ等、学問的にも非常に貴重である。これ以上の開発は避け、バス乗り入れ禁止など、自然との調和を保ちながら有効利用を考えるように」

との意見が出され、又行政関係者からは、

「教育委員会と連繫を密にし、学童用の副読本等を作成し、観察ゾーンや案内板を設け、林内への立ち入りは学術参考林として散策コース設置程度に止めることが望ましい」

と、その利用について具体的意見が出された。

町当局は、関係者の意見を参考にして、これ以上の開発はしない事を前提に、林内の一部を散策コースとして一般に開放し、学習の為のコースを設ける事を決定した。

町では早速通路を整備し、誰でも歩くことのできる二〜三時間のコースを設け、植物には名前を付し「学習の道」と名付け、昭和五十九年四月より一般に開放した。

一、植 物

(一) 山 岳 部

(1) 玄岳・氷が池付近

玄岳は急峻なせいか、観光化を免れ有史以来の姿でそそり立っている。玄岳と言えば戦前は小学校の遠足のコースだったので年輩の人達にとっては郷愁を覚えるであろう。



玄岳より富士を遠望

玄岳の魅力の最大のものは何といっても山頂からの展望である。晴れた日には上総、甲斐等十国は言うに及ばず、遠くは南アルプスの山波、近くは富士、天城の山々の展望、又田方平野を眼下に見おろし、駿河湾や果てしなく続く大海原に浮かぶ伊豆の島々が一大パノラマを形成している。この素晴らしい眺めは源実朝が箱根権現参詣からの帰途「箱根路をわが越えくれば伊豆の海やおきの小島に波のよるみゆ。」と詠んだ頃といささかも変わっていない風景で、天下一の絶景と言える。

玄岳は風衝草原で山の大部分をミヤマズタケが覆い、頂上付近にミヤマクマザサの群落が少しみられる。僅かに残された草原にはオガルガヤやトダシバをまじえたススキの草原が続き、夏から秋にかけて、目にしみるような美しく咲く気品のあるマツムシソウやタムラソウが咲き乱れ、ワレモコウ、サウヒヨドリ、アキノキリンソウ、シラヤマギク、リンドウ、ミズギボウシ等も咲き競う。

池の周囲の草原には春は一面のオキナグサ、アヅマギク、タチツボスミレ等が咲き誇り、夏にはタムラソウ、センブリ、ツリガネニンジン、リンドウ、ホウチャクソウ、ホトトギス、サラシナショウマ、クサアジサイ、チダケサシ等が色どり、なかでもノギラン、カキランの美しさは一きわめだつ。

ススキやチガヤにまじつてコウボウシバ、イチゴツナギ、シラヤマギク、オカトラノオ、カゼクサ、ヤハズソ



食虫植物・モウセンゴケ

スカイライン沿いの道端にはオオバギボウシ、ヒヨドリバナ、アリノトウグサ、ヤマジソ、ミツバツチグリ、トウダイグサ等が見られ、木本ではイヌツゲ、ウツギ、ハコネウツギ、ヤシヤブシ、マユミ、コアジサイ、テリハノイバラ等が伸び切れないで強風に耐えている。頂上から真下を見下ろすとスカイラインから少し下った所に、周囲数百メートルの「氷が池」がある。人造の水ができなかつた明治の頃には、この池に張りつめた天然の水を運んで利用したので「氷が池」の名前が今も残っている。付近には牧場もあり、家畜を飼育したと言われるが、今はその面影は残っていない。最近池の水が急に減り池も小さくなり植物相もかなり変わってきた。

ミヤマスズタケが池の周囲を一面に覆い、このミヤマスズタケの中に強風にしいたげられたイヌツゲやアセビが盆樹の様な姿をみせている。

ウ、ニガイチゴ、バライチゴ、ヒメハギ、ネコハギ、ヤマハタ
ザオ、ウツボグサ、リンドウ、コガンピ等が力一杯生き続けれ
いる。

この池に流れ込むせせらぎにはホタルイやシカクイが生え、
オオイチゴツナギが一面を覆い、その下の水ゴケの中に食虫植
物のモウセンゴケが可愛らしく顔をのぞかせている。又岸边に
近い水面には草丈一メートル余りのサンカクイが群落をなし池
に風情を添えている。

この草原に寝転んで雲の流れを眺めながら瞑想にふけると、
この草原は現世のものとも思えない幽遠の世界を感じさせる場
所である。

『静岡県植物誌』に羽田、杉野、大村氏等の玄岳付近調査結果
が記載されているので目録として追補しておく。

玄岳植物目録追補

- 。ウマノスズクサ科 アマガカンアオイ
- 。タデ科 マダイオウ
- 。スイレン科 ヒツジグサ
- 。キンボウゲ科 オトメシヤクヤク



氷ヶ池のサンカクイ

- アマ科 マツバニンジン・オニスゲ・ヒメゴウソ・ゴウソ・イトイヌノヒゲ
- イグサ科 コモチコウガイゼキショウ
- ユリ科 ソクシンラン・ショウジョウバカマ
- ヒガンバナ科 コキンバイザサ
- ラン科 クマガイソウ・ミズトンボ・ヤマトキソウ
- ムラサキ科 ムラサキ・ホタルカヅラ
- クマツヅラ科 ナガバヤブムラサキ
- シソ科 チシャリンドウ・キセワタ・キバナアキギリ
- ゴマノハグサ科 イズコゴメグサ・ゴマノハグサ
- タヌキモ科 タヌキモ
- アカネ科 カワラマツバ
- スイカツラ科 ケウツギ

(2) 函南原生林「学習の道」

昭和三十八年に調査した本原生林の三六〇種余りの植物については、既に本誌「上巻」にその概略が記されているので昭和五十九年四月より公開された「学習の道」にみられる植物についての概略と、その後確認された植物や文献に記載されていた植物を目録として追補した。

天候に恵まれれば富士の眺めが素晴らしいと思われる林野原野の春は一面のオキナグサやアズマギク等に目を

奪われ、稀にガイジンドウをみる。四月も半ば過ぎると林縁のマメザクラや林内に点在するコブシの花が一斉に開花し、原生林にもようやく春の訪れを告げてくれる。

スカイラインから入って中小企業センターのホテルの横の道を下ると、丸太作りの案内板と門柱がある。丸太作りの階段をハコネダケを分けながら下ると間もなく巨木が林冠を覆う安定した極相を感じさせる原生林となる。この辺は既に標高七〇〇メートル近く、ウラジロガシ群叢地帯で、アカガシ、ブナ、イヌシデ、ヒメシヤラ、ウラジロガシ等の巨木が生い茂っている。

坂道を下り終ると、せせらぎの道端にハルタデやニリンソウが愛らしく、ひっそりと迎えてくれる、窪地を流れる水辺の藪林中にはナツグミの外、ハコネグミがあり、ナルコスゲが流れに影をうつしている。原生林の中は静寂そのもので木の芽の息吹きがきこえてくるようだ。林床を覆うミヤマカンスゲの中からバイケイソウがすくすく伸びヤマシヤクヤクの花に心をとぎめかす。コチャルメラソウ、ランヨウアオイはひそかに咲き、スミレ類ではナガバノスミレサイシン、ヒメヤマスミレ、コミヤマスミレ、ケマルバスミレ等がその美を競っている。

レンガ色のヒメシヤラの幹に木々の間からさし込む光がまばゆい程にうつる。コクサギの木からは「こうばしい」香りが漂う。少し登ったところにヤブレガサやエンレイソウの小群落に出合う。小道の両側におおいかぶさるようにヤマシバカエデ、ヤマボウシ、ウラジロガシ、アブラチャン、イヌツゲ、マユミ、シキミ、シラキ等が低木層を形成し、林床はフユイチゴ、ツルシキミが這い、ブナにからみつくツルマサキや、梢にはヤドリギ等の寄生植物もみられる。

めり込みそうな腐葉土の坂道を少し登ると原生林のシンボルとも言える大ブナと大ガシの所にでる。

大ブナは目通り六・三メートル、根廻り一二メートル、高さ二四メートルの巨木で、推定樹齢は千年を越える

とも言われ、落葉潤葉樹では稀にみる大木で王者の貫録十分である。

大ガシは目通り六メートル、根廻り一三メートル、アカガシでやはりこれだけの大木は珍しくブナに優るとも劣らぬ貫録を示しているが残念なことに台風で西側の大きな枝を落とし樹勢がやや弱っている。このアカガシの幹に黒味を帯びた馬の尾の毛の様な糸状のものがぶらさがって奇観を呈している。

これは「オオカミノケタケ」というキノコの仲間でアカガシに寄生している珍しい植物である。

この辺から温帯林の植物に少しずつ変わっていく。カシ類はだんだん少なくなり、ブナ、カエデ類が多くなり、オオモミジ、ウリハダカエデやタンナサワフタギが目立つようになる。草本植物としてはヤマジオウ、ウワバミソウ、イヌヤマハツカ、クワガタソウ、羊歯類ではコケシノブ、ヘビノネゴサ、ミゾシダ、ハクモウイノデ等が散生している。学習の道は送電線の鉄塔を過ぎ、やがて沢に沿い下りハコネダケの多い所を抜け、元の道に出会う。

いろいろな時期にゆっくり観賞しながら歩けば四季おりおりのいろいろな動植物に出会える。また静かに独り思索にふけることもできるし、小鳥の声を聞きながら林の中に充滿しているフィトンチッドを吸い込み、森林浴も充分に楽しめる。

ゆっくり歩いても三時間もかければ「学習の道」を探索することができる。

原生林植物目録追補

。ユキノシタ科 アマギコアジサイ・イワガク(杉本)・アマギアマチャ
。バラ科 ヒロハカワラサイコ・シモツケソウ・ミツモトソウ(小早川)・クサボケ・モリイバラ(倉田)

- 。クロウメモドキ科 コバノクロウメモドキ
- 。シソ科 キセワタ・タニジャコウソウ・キバナアキギリ
- 。ゴマノハグサ科 オオヒナノウスツボ(杉本)
- 。アカネ科 チョウセンカワラマツバ・シロバナイナモリソウ
- 。スイカズラ科 ナガバゴマキ
- 。キク科 イガアザミ・ヒメヒゴダイ
- 。イネ科 サヤヌカグサ
- 。ハマウツボ科 ナンバンギセル
- 。ユリ科 エンレイソウ・オモト・シオデ・ホウチャクソウ
- 。ラン科 ムギラン(杉本)・オオハクランラン(勝又)・アキザキヤツシロラン(勝又)・ツチアケビ・エビネラ
ン・トキンラン

原生林のシダ・コケ類

原生林は広葉落葉樹を主体に標高六〇〇メートルから八〇〇メートルにわたって広がる厚い落葉におおわれた肥沃な覆土を持つ人の手の加わらない全くの自然林である。豊かな日光も森林の重なり合う枝でさえぎられ、林床のうす暗く、シダ・コケの好出条件を有しているが、比較的表土には湿り気が少なく、伊豆天城山の林内の状況とはやや異なっている。従って生育しているシダやコケ類も、木の幹や岩等に着生するようなチャセンシダの仲間やウラボシ科に乏しく、どちらかというと暖地性の大きな根茎で株を形成するようなヘビノネゴザ等が目立

ち特筆する様な種は少ない。コケ類も腐葉土の中から叢生するシツボゴケや、根茎が横に伸びるオオカラカサゴケやコウヤノマンネンスギが目を引くのとどまる。しかし強風等で倒れた高木の梢に付着していたスギランがあることから更に調査を重ねれば、貴重なオオクボシダ、マツバラン等も発見出来得る可能性も充分にある。次に確認出来た種を目録として列記してみる。分類は田川基二博士の『原色日本シダ植物図鑑』と志村義雄先生の『日本シダ植物生態写真集成』によった。

シダ類

①ヒカゲノカズラ科

ヒカゲノカズラ、スギラン、トウゲシバ

ホソバトウゲシバ

②イワヒバ科

クラマゴケ、タチクラマゴケ

③トクサ科

スギナ

④ハナワラビ科

フユノハナワラビ

⑤ゼンマイ科

ゼンマイ

⑥フサシダ科

カニクサ

⑦ウラジロ科

ウラジロ、コシダ

⑧コケシノブ科

コウヤコケシノブ、ウチワゴケ

⑨イノモトソウ科

フモトシダ、イヌシダ、オウレンシダ、ホラシノブ、ワラビ、イワガネソウ、タチシノブ、イノモトソウ、オオバノイノモトソウ

⑩オシダ科

イヌガンソク、コウヤワラビ、ジュウモンジシダ、

イノデ、イノデモドキ、ヤブソテツ、ヤマヤブソテツ、リヨウメンシダ、イタチシダ、ベニシダ、クマワラビ、ミヤマイトチシダ、ゲジゲジシダ、ハリガネワラビ、ヤワラシダ、ヒメワラビ、ミゾシダ、ハシゴシダ、ホシダ、シケチシダ、ホソバシケシダ、シケシダ、イヌワラビ、ヤマイヌワラビ、タニイヌワラビ

⑪ シシガシラ科

シシガシラ

⑫ チャセンシダ科

トラノオシダ

⑬ ウラボシ科

ノキシノブ、ヒメノキシノブ、ミヤマノキシノブ、マメヅタ、ヒメサジラン

コケ類

① スギゴケ科

タチゴケ、コスギゴケ、オオスギゴケ

② ホウオウゴケ科

ホウオウゴケ

③ シツボゴケ科

シツボゴケ

④ シラガゴケ科

シラガゴケ

⑤ カサゴケ科

オオカサゴケ

⑥ チョウチンゴケ科

コツボゴケ、コバノチョウチンゴケ、ケチヨウチンゴケ、

⑦ マンネンゴケ科

コウヤマノマンネンゴケ

⑧ ヒムロゴケ科

ヒムロゴケ

⑨ ヒラゴケ科

リボンゴケ、キダチヒラゴケ、オオトラノオゴケ

⑩ シノブゴケ科

トヤマシノブゴケ、オオシノブゴケ

⑪ ハイゴケ科

ハイゴケ

⑫ ハネゴケ科

コハネゴケ

⑬ ジャゴケ科

ジャゴケ

⑭ ゼニゴケ科

ゼニゴケ

(二) 丘陵地帯〜東部山岳地帯

この地域は植物分布からみると暖帯に属し、原生林の背梁付近が温帯になっている。暖帯を代表する樹種はカシ類、シイ類、タブノキ、クスノキ等の常緑広葉樹で、中でもカシ類はこの暖帯の代表的な樹種であるので暖帯をカシ帯とも言っている。

この地域にはカシ類が非常に多く、神社の社叢には必ずクスノキやシイと一緒に自生している。カシ類の中でもアラカシは神社や寺の境内ばかりでなく人工林の中にもみられ一般的である。

又アカガシもタブ、スダジイ等と共に社叢に多く、丹那、田代方面には道路脇などにも多く、原生林には非常に多い。シラカシ、ツクバネガシは比較的少なく、畑毛の白山神社には両種の自生をみる。特に白山神社のシラカシは推定樹齢千年とも言われる見事な大木である。イチイガシは桑原長源寺に多く、神原の山の神社にもみられる。ウラジログシは丹那の雷電神社の社叢に、また原生林に近い馬坂部落の辺に自生をみる。

(1) 来光川・柿沢川流域の植物

雑木林にみられる落葉樹をあげてみると、

ブナ科のクヌギ・コナラ・クリを主体として、マメ科のネムノキ・ヤマハギ・マルバハギ・ミカン科のカラスノサンショウ・イヌザンショウ・サンショウ。カエデ科のイロハカエデ・エンコウカエデ。スイカズラ科のハコネウツギ・ガマズミ・ウグイスカグラ。ウルシ科のハゼ・ヌルデ。バラ科のカマツカ・コゴメウツギ・ヤマザクラ。また——アカメガシワ・クサギ・キブシ・ゴンズイ・クロモジ・

オニグルミ

ハナイカダ・クコ・ウツギ・ヤマガキ・ヤマグワ・ドクウツギ・ハシバミ・イボタノキなどで、ヤナギ科のシバヤナギ・タチヤナギ・コリヤナギ。バラ科、低木のニガイチゴ・バライチゴなどが見られる。処によつてはエゴノキ・マユミ・ニシキギ・ハリギリ・ホウノキの自生をみる。また、川沿いにいつぱい実をつけたクルミの大木もみられる。

雑木林での常緑樹の樹種は落葉樹に比べると少ないが、個体数はかなり多い。

ツバキ科のヤブツバキ・ヒサカキ・サカキ。クスノキ科のシロダモ・ヤブニツケイ。また——アオキ・イヌガヤ・アリドウシ・イヌツゲ・ヤブコウジや半常緑低木のヤマツツジなどである。

これらの雑木林の植物にからみついて樹木の成長を妨げたり、草類

にからみつく蔓性の植物は、

ブドウ科のエビヅル・ノブドウ・ヤブガラシ・ナツツタ。アケビ科のアケビ・ミツバアケビ。マメ科のクズ・フジで、また——スイカズラ・クマヤナギ・テイカカズラ・イタビカズラ・コボタンヅル。ヤマイモ科のヤマノイモ・トコロ。ガガイモ科のキジョラン・カモメズル・シタキシソウ。ウリ科のカラスウリ・アマチャズル。ユリ科のシオデ・タチシオデで、また——ヘクソカズラ・センニンソウ・などである。

山林の下草や原野の山草には、

キク科のヒヨドリバナ・ヨメナ・リュウガギク・アキノキリンソウ、サジガnekビソウ・キツネアザミ・コウモリソウ・コヤブタバコ。シソ科のメハジキ・トウバナ・ウツボグサ・アキノタムラソウ・ナツノタムラソウ・ヤマハッカ。キキョウ科のツルニンジン・ツリガネニンジン・ホタルブクロ。リンドウ科のリンドウ・ツルリンドウ。また、——ルリソウ・ハエドクソウ・オカトラノオで、タデ科のスイバ・イタドリ・ミズヒキ。バラ科のキンミズヒキ・ワレモコウ・ダイコンソウ。セリ科のセリ・ミツバ・ノダケ。キンポウゲ科のウマノアシガタ・アキカラマツ。オトギリソウ科のオトギリソウ・コケオトギリ。スミレ科のタチツボスミレ・ニオイタチツボスミレ・ニヨイスミレ・コスミレ。また、——ナツトウダイ・コマツナギ・バイカイカリソウ・ヤブマオウ・ウマノ



葉草・アマチャツル

スズクサ。单子葉植物で、ユリ科のホウチャクソウ・ナルコユリ・アマドコロ・チゴユリ・オオバジャノヒゲ・ジャノヒゲ。イネ科のススキ・チヂミザサ。カヤツリグサ科のイトスゲ・アオスゲ・カンスゲなどである。雑木林の中で、気品のあるものとして、ラン科のキンラン・ギンラン・ササバギンラン・コ克蘭・シュンラン・エビネ等が見られるが、クマガイソウは濫獲によってほとんど見られなくなった。

宅地造成地や畑などでみられる草本

キク科のハハコグサ・オニノゲシ・アメリカセンダングサ・オオアレチノギク・ヒメジョオン・ヒメムカシヨモギ・オトコヨモギ・オニタビラコ・ハルノノゲシ・オナモミ・コウゾリナ・タカサブロウ。また——オオバコ・ヒヨドリジョウゴ・コヒルガオ・コナスビ・エゴマ・アゼトウガラシで、タデ科のミチヤナギ・ハナタデ。ヒユ科のイヌビユ・アオゲイトウ・イノコズチ。マメ科のシロツメクサ・カラスノエンドウ。カタバミ科のムラサキカタバミ・カタバミ。アブラナ科のイヌガラシ・マメグンバイナズナ・タネツケバナ。トウダイグサ科のエノキグサ・コニシキソウ。また——ドクダミ・オオマツヨイグサ・シロザ・スベリヒユ・ハコベ・カラムシ・ヤブジラミ。单子葉植物ではイネ科のオヒシバ・メヒシバ・ニワホコリ・スズメガヤ・エノコログサ・カズノコグサ・イヌムギ・ネズミガヤ・スズメノヒエ・キツネガヤ・オオイチゴツナギ・イチゴツナギ・カ



オオマツヨイグサ

モガヤ・オオアワガエリ。カヤツリグサ科のカヤツリグサ・アゼガヤツリ・タマガヤツリ・ヒメクグ・ナキリスゲ・コゴメガヤツリなどである。

湿地では、ミゾソバ・アキノウナギツカミ・セリ・イヌビエなどが見られる。

シダ類は、

ウラボシ科のタチシノブ・マメズタ・イノデ・イノモトソウ・オオバイノモトソウ・イワガネソウ・ノキシノブ・ヒメノキシノブ・ホラシノブ・イヌシダ・イタチシダ・イヌワラビ・ワラビ・コモチシダ・コシダ・ハシゴシダ・ベニシダ・フモトシダ・リョウメンシダ・トラノオシダ・ホシダ・ゲジゲジシダ・ヒメワラビ・ヤブソテツ・メヤブソテツ・ハコネシダ・シシガラシ。イワヒバ科のクラマゴケ・カタヒバ。また——カニクサ・ゼンマイ・スギナ・フユノハナワラビ・トウゲシバなどである。

(2) 丘陵地帯における注目すべき植物

ミツマタ

丹那や桑原方面の林内によくミツマタをみかけるが、この植物は中国から紙を作る原料として慶長年間に渡来し帰化したものである。

この地方の雑木林にこのミツマタがみられるのは、大仁町神島出身の本草学者梅原寛重氏は江戸時代に伊豆地方にミツマタの栽培を大々的に奨励した。

このチンチョウゲ科のミツマタは名前の通り枝の先が三つに分かれており落葉灌木である。このミツマタの繊維は我が国の紙幣に使う紙の原料で、これにマニラ麻、木綿、稻わら等が加えられて作るのであるが、その強さ、柔軟さ、弾力性など世界一といわれている。函南町桑原には「ミツバタケ」という名の山がある。

モクレイシ(ツルウメモドキ科)

畑毛の白山

神社、柏谷

養源寺、桑原白山神社、函南町長中村博夫氏宅地に分布している。

狩野川流域では大仁町の広瀬神社に多くみられる。我が国では伊豆七島と九州南部の限られた地域と、伊豆半島にのみ隔離分布する植物で学問上からも注目されている。

外見は一見モチノキに似ているが、葉が対生であるからすぐに区別できる。冬月蒴果が裂開して大きな種子を露出するとき最も目を惹く。

ケンボナシ(クロウメモドキ科)

桑原の祢宜寺、入谷に大木があつたが入谷のケンボナシは台風で倒れ今はない。

伊豆では葦山の江川邸内、中狩野、八幡野に分布するだけの珍しい植物である。秋果実をつけた肉質枝は甘味があり、昔は子供がそれを食べた。

(三) 平野部

(1) 海浜植物の分布



遺存植物・モクレイシ

この地域の一つの大きな特徴は神社の社叢や人の手の加えられなかった岩や崖に海浜性の植物ウバメガシ、ヒメユズリハ、モクレイシ、トベラ等が分布していることである。

これらの植物は伊豆沿岸に普通な暖地性常緑闊葉樹であり、強健で寿命が比較的長く、種子をよく散布して、その場所に後継者をつくるもので、利用価値が余り高くないという遺存植物の特徴をそなえたものである。韭山高校教諭羽田昂は「狩野川平野の成立とその遺存植物」(一九五二年)のなかで狩野川流域の遺存植物の分布を調べ田方平野の前身が海であったことを論じている。

筆者も文献を参考にしながら狩野川流域の遺存植物を詳細に調べたところ大仁から下流の神社や岩や崖地域にヒメユズリハ、ウバメガシ、モクレイシ等の遺存植物が下の表に示す通り分布している事が再確認された。

狩野川台風の後、狩野川放水路の掘削工事に先立って長岡町堀之上一帯にボ

狩野川流域における遺存植物の分布状況

上流	中								流				下				流	調査地点
中伊豆町大宮神社	大仁町広瀬神社	大仁町神島神社	長岡町大門橋付近	長岡町珍野神社	韭山町守山	韭山町龍城山	韭山町江川邸	韭山町多田熊野神社	函南町大土肥(神社)	函南町柏谷(神社)	函南町畑毛(神社)	函南町塚本神社	〃八幡神社	清水町湯川神社	〃大平(本城山・大井)	沼津市香貫山北端		
○	○	○	++	○	++	++	○	○	○	○	++	++	○	+	++	++	ウバメガシ	
+	++	○	○	+	○	○	+	○	++	+	++	++	++	○	+	++	ヒメユズリハ	
○	++	+	○	++	○	○	○	++	○	○	○	○	○	○	○	○	モクレイシ	

備考 +の数で個体数の多いか少いかを示す。○は無いことを示す。

ーリングが行なわれたが、その際地下約十メートルの粘土層から多くの貝殻がでてきた。羽田氏はその一部を同定したがその貝殻は現在のもののでカニノテムシロ、カハアヒ、ウミナナ、シホヤガイ、カキ等であつたと報告している。カニノテムシロは殆ど完全な個体で、現在九州、大島、琉球等の暖海に棲息するものであるから、当時の伊豆の気候は現在よりもずっと暖かつたことがわかる。

この地域に前記亜熱帯性の植物が分布していたことは決して不思議なことではなく、このような遺存植物の分布の上からも、又海産貝類の遺跡からも田方平野の前身が海であり、沖積平野であることは疑う余地は全くない。

(2) 植物分布上注目すべきところ

畑毛・白山神社

温泉街から少し離れた小高い丘の上にあり、社殿は茅ぶきの古めかしい建物であるが境内は広く、樹木は鬱蒼と茂り、原生当時の面影を偲ばしめる。推定樹齢千年を越すと思われるシラカシの外スダジイ、タブ、ヤブニツケイ、ツクバネガシ、ケヤキ、ムク、カエデ、カゴノキ、ヒメユズリハ、マテバジイ、モクレイシ、モッコク等が古色蒼然と鎮守の森を形成している。

塚本・満宮神社

塚本部落の外れに「田方の社」と古くから言われ、土地の人達に親しまれてきた満宮神社がある。神社の境内にはクス、ケヤキ、イヌシデ、オガタマノキ等がある。神社の西斜面は安



海浜植物・ヒメユズリハ

山岩質の岩山になっていて、山頂部は風化した白色凝灰岩があり、ここにも天然林に近い社叢をみることができる。

ここにはウバメガシ、ヒメユズリハ、ヤマモモ、トベラ、タブ、クロガネモチ等海浜性の強い植物が自生しており、神社の裏山にはヒノキ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、クマノミズキ、ネジキ等が、低木層にはムラサキシキブ、アオキ、アオダモ、カマツカ、イヌビワ等がみられる。

岩の上にはヒトツバが群落をつくり、かつてはこの小さな山が島であつたことを彷彿させる。

畑毛・大仙山

大仙山の西斜面は大きな岩塊の岩山であり、中国の風景を思わせる素晴らしい景観である。岩肌に食いつくように海浜植物のウバメガシにトベラを交えた群落がある。狩野川流域では大仁町の水晶山のウバメガシ群落と共に天然記念物にしても価値ある自然である。

かつては岩山の頂上部に天然記念物「大仙松」と称したクロマツの大木があつたが今は枯れてない。

天地神社(平井)

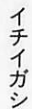
神明神社(間宮)

白山神社(桑原)

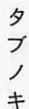
県東部農林事務所の詳細な調査と指導を受ける。その結果を図示すると、次のとおりである。



ヒトツバ (塚本・満宮神社)



タブノキ



(3) 日守付近の植物

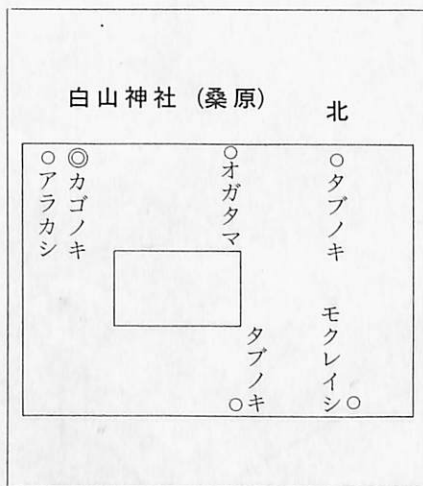
日守の大嵐山（一九一メートル）は大平山（三五六メートル）、鷲頭山（三九二メートル）へ続き、更に徳倉山から香貫山に続く静浦山地の一部をなしている。

この地域は地史的には古いが、早くから人の手が加えられヒノキやクヌギが植林され、大部分は雑木林となっている。

大嵐山付近の林内にはバイカイカリソウ、ヤブラン、シャガ、イノコヅチ、キツコウハグマ、ヤマハツカ、トウバナ、ルリソウ、ハエドクソウ、コウモリソウ等の陰性植物が多い。熊野神社北側の沢沿いではチダケサシ、コアカソ、ヤマホトトギス、ツリガネニンジン、ホウチャクソウ等がみられ、木本としてはコクスギ、ヤブツバキ、エノキ、ムラサキシキブ等がみられ、暖地性シダの代表種であるヘラシダの群落もみられた。



カゴノキ（間宮・神明神社）



新城橋から石堂橋にぬける日守の主要道路から

分かれ部落に入る道端にはススキ、シバ、コヒルガオ、ノニガナ、メヒシバ、シロツメクサ、ヨモギ、コブナグサ、カタバミ、アレチノギク、ヒメアシ、キツネノボタン、スギナ、アゼガヤツリ、カモジグサ等が又畔にはイヌビエ、カズノコグサ、カンスゲ、コゴメガヤツリ、タネツケバナ、アキノウナギツカミ、エゴマ、ミゾソバ、ヤブジラミ、ハナタデ、オオイチゴツナギ、カヤツリグサ、タマガヤツリ、コナギ等がみられた。

水田は除草剤がまかれ雑草は少ないがマツバイやアギナシがわずかにみられウキクサも少し水に浮いていた。狩野川流域の日守、新城橋付近の河原にはカワヤナギやイヌコリヤナギが点々と自生しその間をアシやアブラススキ、オギ、トダシバ等が埋めつくし、オオイヌタデやホンドクタデが水際に群落をなしている。堤防際には帰化植物のオオバタクサが侵入し、背丈二〜三メートルにも及ぶ大きな株が他の植物を圧倒している。

(4) 函南町の帰化植物

帰化植物とは「人為的に、意識的、無意識的に移入され、野生状態で生育している植物」のことである。

江戸時代には県内でたった六十種だった帰化植物が現在四五九種の分布が確認されている。

特に戦後は諸外国との貿易が盛んになり、人の往来は言うまでもなく、輸出入量は莫大な量となり、広く世界の国々と貿易を行なっている。人の食糧ばかりでなく家畜の飼料の大部分を諸外国に依存するので、それらに混



チダケサシ(大嵐山)



アレチウリ



オオブタクサ

じって移入し帰化したものも非常に多い。

外国船の出入する港が一次の帰化センターとなり、交通機関の中心である駅や人の出入りの多い公園やキャンプ場の荒地等が二次、三次の帰化センターになる事が多い。函南町は伊豆の玄関口で町内を伊豆箱根鉄道や東海道線が走り、駅もあるし、酪農地帯であるので諸外国からの飼料も多く入ってくるので帰化植物のセンターになる条件を揃えている。激激な都市化により人の往来も激しいので今後帰化植物はますます多くなるだろう。現在までの分布の確認された帰化植物をあげておく。

第十二章 植物・動物

。ウリ科 アレチウリ

。キク科 オナモミ・ブタクサ・オオブタクサ・ヒメムカシヨモギ・ホウキギク・センダングサ・ヒメジオン・

ヘラバヒメジオン・ハキダメギク・キクイモ・ノゲシ・ヒロハホウキギク・オオナモミ・イガオナ
モミ・ベニバナボロギク・ダンドボロギク・アレチノギク

。オオバコ科 ヘラオオバコ

。ゴマノハグサ科 イヌノフグリ・タチイヌノフグリ・オオイヌノフグリ

。ナス科 シロバナチョウセンアサガオ・センナリホーズキ

。ムラサキ科 ワスレナグサ

。アカバナ科 コマツヨイグサ・ツキミソウ・オオマツヨイグサ

。アオイ科 ゼニアオイ・ハイアオイ・ギンセンカ

。トウダイグサ科 コニシキソウ・ニシキソウ

。カタバミ科 ムラサキカタバミ

。フウロウソ科 アメリカフウロウ

。マメ科 コメツブウマゴヤシ・シロツメクサ・オオカラスノエンドウ

。アブラナ科 アレチナズナ・アコウグンバイ・グンバイナズナ

。キンボウゲ科 シュウメイギク

。ヒユ科 イヌビユ・アオゲイトウ

。タデ科 オオケタデ・ギシギシ・アレチギシギシ・マダイオウ



セイダカアワダチソウ

○アヤメ科 ヒメヒオウギズイセン

○イネ科 コバンソウ・イヌムギ・ジュズダマ・ナガハグサ・

オニウシノケグサ・ネヅミムギ・ボウムギ・セイバ

ンモロコシ

○アカザ科 ゴウシユウアリタソウ

○ユキノシタ科 ユキノシタ

○ニガキ科 シンジユ

最近狩野川流域にセイダカアワダチソウが侵入してきた。町内への侵入も時間の問題だと思われる。

参考文献

(1) 一九五二 『狩野川平野の成立とその遺存植物』 羽田 勲

(2) 一九六七 『静岡県植物誌』 杉本 順一

(3) 一九七六 『静岡県帰化植物目録』 杉野 孝雄

(4) 一九七九 『静岡県の生物』 静岡県生物教育会

(5) 一九八四 『縄文時代』 小野 修三

二、動物

動物は移動性がはげしく現状把握が非常にむずかしいが、比較的よく調査されている鳥類と蝶類のみを掲載することにする。

(一) 鳥類

函南町は丘陵地、低山地へと林は続き、谷あいには湧水や川がある。川筋の護岸工事以外は自然のままである。林相は造林地で単純林であるので野鳥の生息地としてはあまり良いとは言えないため種類数も個体数もあまり多くない。しかし原生林のままの「禁伐林」は探鳥地として楽しめる。

庭先で見られる鳥

人に一番身近なスズメ、ピーヨピーヨと波状に飛ぶヒヨドリ、デデポー、デデポーと鳴く俗に山鳩と云われるキジバト、戸袋などに巣をつくるムクドリ、黒い頭と白いほほと黒ネクタイのかわいらしいシジウカラ、ウグイスも冬から春にチツチとさらに「ホーホケキョ」のさえずりを聞かせてくれる。冬鳥ではツグミ、ジョウビタキなどが見られる。

村落・平地の鳥

大空に舞い上がりながらさえずり春を告げるヒバリ、キリリ、コロロと鳴き羽に黄色の紋のあるカワラヒワ、尾が三味線のばちの形でピーヒョロロと大空をゆつくり帆翔するトビ、モズは秋に枯枝や電線でキイー、キチキチと鋭く鳴いてなわばりの宣言をする。夏鳥のアオバヅクは五月、青葉の頃神社や寺の太木でホー、ホーと夜鳴いている。草原や田圃でヒッヒッヒッと上昇しチャツチャツとくだるセツ

カ、冬鳥のカシラダカ、タヒバリを冬のひらけた畑でみかける。カラスにはハシボソガラスとハシブトガラスの二種類がある。

水辺の鳥

冬鳥のコサギは冬に田方平野一帯水田、湿地、川で多く見られる。レンゲ草の咲く五月頃にはコサギの群に頭部と首が橙色のアマサギ、コサギよりやや大きく足指の黄色いチュウサギが少数混じっている。コサギは夏でも少数のものをみる。カルガモは他のカモ類と異なり一年中池や川にすみついている。背が青く、つやのある美しい色彩のカワセミは水中の杭にとまり魚をねらっている姿をよくみかける。石だたきともチチン鳥とも呼ばれるキセキレイ、セグロセキレイ、ハクセキレイは川筋の石の上で尾を上下にふっている。

低山地の鳥

冬は群れて草原や河原などを、チチツ、チチツと地鳴きしていたホホジロは春から夏にかけて明るい林の梢で「一筆啓上仕り候」と聞こえる美しいさえずりを、ウグイスも春から初夏にかけてよくさえずる。メジロはツバキ、ウメ、サクラの蜜を好んで吸っている。

キコークキーとのどかに鳴くイカル、鳩ぐらいの大ききで、丸っこく黄褐色のチョットコイ、チョットコイの声を遠くまで通すコジュケイ。カラ類のシジュウカラ、ヤマガラ、エナガは群をつくり、いそがしく木々の間を飛び回るのを一年中見かける。夏鳥のカッコウやホトトギス、ツツドリは渡りの途中桑原地区でその声をしばしば聞かれる。沢沿いの林で美しいルリ色の大ルリは突出した枝で美声でさえずる。

林の深い藪ではさえずりの「焼酎一杯ぐい」のセンダイムシクイ。「シシシ……」と虫の鳴くようなヤブサメなどがいる。

函南町で観察された鳥

- ① カイツブリ科 カイツブリ
- ② サギ科 ミソゴイ、ゴイサギ、アマサギ、チュウサギ、コサギ
- ③ ガンカモ科 オシドリ、カルガモ、キンクロハジロ
- ④ ワシタカ科 ハチクマ、ノスリ、サシバ、チョウゲ
ンポウ
- ⑤ キジ科 コジュケイ、ヤマドリ、キジ
- ⑥ クイナ科 バン
- ⑦ タマシギ科 タマシギ
- ⑧ チドリ科 コチドリ、ダイセン、ケリ
- ⑨ シギ科 ウズラシギ、タカフシギ、イソシギ、ヤマシギ、タシギ
- ⑩ カモメ科 ユリカモメ
- ⑪ ハト科 キジバト、アオバト、ドバト
- ⑫ ホトトギス科 カツコウ、ツツドリ、ホトトギス
- ⑬ フクロウ科 アオバヅク、フクロウ

- ⑭ ヨタカ科 ヨタカ
- ⑮ アマツバメ科 ヒメアマツバメ、アマツバメ
- ⑯ カワセミ科 カワセミ
- ⑰ キツツキ科 アリスイ、アオゲラ、アカゲラ、コゲラ
- ⑱ ヒバリ科 ヒバリ
- ⑲ ツバメ科 ツバメ
- ⑳ セキレイ科 キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ビンズイ、タヒバリ
- ㉑ サンショウクイ科 サンショウクイ
- ㉒ ヒヨドリ科 ヒヨドリ
- ㉓ モズ科 モズ、カワガラス
- ㉔ ミソサザイ科 ミソサザイ
- ㉕ ヤマシギイワヒバリ科 カヤクグリ
- ㉖ ヒタキ科 コルリ、ルリビタキ、トラツグミ、セツカ、クロツグミ、アカハラ、シロハラ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、オオヨシキリ、メボソムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、エゾビタキ、

サンコウチョウ

②⑦ エナガ科 エナガ

②⑧ シジュウカラ科 コガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジ

ユウカラ

②⑨ メジロ科 メジロ

③⑩ ホホジロ科 ホホジロ、ホホアカ、カシラダカ、ミ

ヤマホホジロ、アオジ

③⑪ アトリ科 カワラヒワ、ウソ、イカル、シメ

③⑫ ハタオドリ科 スズメ

③⑬ ムクドリ科 ムクドリ

③⑭ カラス科 カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

〔日本野鳥の会沼津支部・鈴木康夫、
渡辺康孝氏の資料による〕

(二) 蝶 類

静岡県下で今までに記録された蝶は土着種のみで一三七種が報告されている。函南町周辺で分布が確認されている蝶は六五種であるから当地方は豊富な地域といえる。注目すべき種類としては函南原生林に生息するキリシマミドリシジミ・丘陵地帯のクヌギやコナラの林に多くみられるアカシジミやウラナミアカシジミ・又ミドリシジミが平地に分布していることも当地方の特徴といえる。次に分布の概要を述べる。

耕作地とその周辺

キャベツ・ダイコン等アブラナ科植物が栽培されている丘陵地帯の畑にはモンシロチョウやスジグロチョウが発生し、特に前者の生活はこのようなアブラナ科植物と深い関係をもっている。最近キャベツの栽培面積が減り消毒が徹底するようになったせいかモンシロチョウが減りスジグロチョウがふえつつある。又丘陵地帯の人参畑にはキアゲハが多く集まってその葉に産卵する。

インゲン、アズキ等のマメ科植物を栽培している畑には七月頃から十一月頃までウラナミシジミが多い。伊豆半島の海岸の無霜地帯で越冬したウラナミシジミは発生を繰返しながらその年のうちに東北地方にまで猛スピードで分布を拡大していく。

平地のイネにはイチモンジセセリやヒメジャノメが産卵して害をあたえる。

耕作地周辺のアゼ道や農道にはスイバ、カタバミなどのいわゆる耕地雑草が生え、ベニシジミやヤマトシジミの生息地となっている。土手や空地にはカナムグラが多くキタテハが発生している。このような蝶は多くの場合野生植物を食していたものが農耕とともに耕作地とその周辺に生息地を形成したものである。

神社や人家周辺

ミカンやサンショウの木を植えてある人家にはよくアゲハチョウやクロアゲハが産卵のためによく集まる。当町の神社や寺にはクスやタブ・オガタマの木が多くアオスジアゲハの生息

地となっている。

森林

丘陵地帯のクヌギやコナラの林にはアラカシ等が混生していることが多く、下草としてササ類が生えている。クヌギやコナラの枝をたたくとオオミドリシジミ・ミズイロオナガシジミ・アカシジミ・ウラナミシジミ等が飛び立つ。アカシジミやウラナミアカシジミは入梅の頃樹上を飛んでいる姿をよくみかける。

クヌギの樹液にはキマダラヒカゲがよく集まる。道端の林縁にあるイボタの生えている所にはウラゴマダラシジミがよく集まり六月の末頃毎年決まって発生する。

杉やヒノキの林床にはオオバウマノスズクサが多いのでジャコウアゲハが適当な産卵場所を探しゆつくり飛び回っている。あまり明るくない竹やササの多い所にはクロヒカゲ・ヒカゲチョウが多く、ゴイシジミの幼虫はササに寄生しているアブラムシを食べている。

林道の明るい処に生えているフジの花にはウラギンシジミが多く、テングチョウやルリタテハは道路上にいて人が近づくと飛び立つ。イチモンジチョウやコミスジはクサギの花によく集まる。

原生林とその周辺

原生林内にはクサギが多いのでカラスアゲハの個体数が多く、明るくしめつぽい処で吸水している姿をよくみかける。林内にはヒメキマダラヒカゲが標高の高い方にいる。

原生林の周辺の草原にはクロシジミ・キマダラセリ・コキマダラセリ・ジャノメチョウやヒヨウモンチョウの仲間が七月から八月にかけチダケサシ等によく集まる。キリシマミドリシジミは発生時期もミドリシジミの中では一番遅く七月下旬から八月中旬に羽化する。成虫は午前十一時頃から午後二時頃に活動するが、金緑色の翅を夏の陽ざしに輝かせながら矢の様な早さでアカガシの木の間を飛ぶ姿は正に王者の貴族充分である。

最近日守で南方系のクロコノマチョウが、又狩野川の堤防でギンイチモンジセリのいる事が確認され分布上の話題を投げかけている。

次に当町周辺に生息するチョウとその食草リストを掲げておく。種名の下の()内の標示は上段が多いか、少ないか、下段が多く見られる地域を示している。地域の記号Ⅱ平(平地)・丘(丘陵地帯)・原(原生林)。

函南町周辺に分布する蝶とその食草

①アゲハチョウ科

- 1 アオスジアゲハ・(多・平)クスノキ・タブノキ
- 2 アゲハ・(多・平) ミカン・サンシヨウ

- 3 キアゲハ・(多・丘) ニンジン・ノダケ
- 4 クロアゲハ・(普・丘) ミカン・カラタチ
- 5 オナガアゲハ・(普・丘) コクサギ・カラタチ
- 6 ジャコウアゲハ・(多・丘) オオバウマノスズクサ
- 7 モンキアゲハ・(少・丘) カラスザンシヨウ

ミカン・カラタチ

8 カラスアゲハ・(少・原) コクサギ・カラタチ

② シロチョウ科

9 モンシロチョウ・(多・平) アブラナ科

10 スジグロチョウ・(多・丘) アブラナ科

11 キチョウ・(多・丘) ハギ類・ネムノキ

アカシア

12 ツマグロキチョウ・(少・平) カワラケツメイ

13 モンキチョウ・(多・丘) ウマゴヤシ・コマツナギ

14 ツマキチョウ・(少・丘) アブラナ科

③ シジミチョウ科

15 ムラサキシジミ・(少・丘) アラカシ・シラカシ

16 ウラゴマダラシジミ・(少・丘) イボタ・ミヤマイボタ

17 アカシジミ・(普・丘) クヌギ・コナラ

18 ウラナミアカシジミ・(普・丘)

クヌギ・コナラ

19 ミズイロオナガシジミ・(多・丘)

クヌギ・コナラ

20 オオミドリシジミ・(少・丘)

コナラ・クヌギ

21 ミドリシジミ・(多・平) ハンノキ・ミヤマハンノキ

22 キリシマミドリシジミ・(少・原)

アカガシ・ウラジログシ

23 トラフシジミ・(少・丘) フジ・クス

24 コツバメ・(少・丘) ガマズミ

25 ベニシジミ・(多・平) スイバ・ギシギシ

26 ウラナミシジミ・(多・丘) フジマメ・ソラマメ

ササゲ・大豆

27 ゴイシシジミ・(少・丘) タケノアブラムシ

28 ヤマトシジミ・(多・平) カタバミ

29 クロシジミ・(少・原) クヌギ・コナラ

30 ルリシジミ・(普・平) フジ・ハギ

④ ウラギンシジミ科

31 ウラギンシジミ・(普・丘) フジ・クス

⑤ テングチョウ科

32 テングチョウ・(少・丘) エノキ

⑥ タテハチヨウ科

33 ミドリヒヨウモン・(多・原)

スマイレ類

34 ウラギンスジヒヨウモン・(少・原)

スマイレ類

35 オオウラギンスジヒヨウモン・(少・原)

スマイレ類

36 メスグロヒヨウモン・(少・原)

スマイレ類

37 ウラギンヒヨウモン・(少・原)

スマイレ類

38 イチモンジチヨウ・(普・丘)

スイカズラ

39 コミスジ・(少・丘) ニセアカシア・フジ・クス

40 サカハチチヨウ・(少・丘) イラクサ・アカソ

41 キタテハ・(多・平) カナムグラ

42 アカタテハ・(普・丘) カラムシ・ヤブマオ

43 ヒオドシチヨウ・(少・丘) エノキ・ニレ

⑦ ジャノメチヨウ科

44 ルリタテハ・(少・丘) サルトリイバラ

45 コムラサキ・(少・丘) 各種ヤナギ

46 スミナガシ・(少・丘) アワフキ

47 ゴマダラチヨウ・(少・丘) エノキ

48 ヒメウラナミジャノメ・(多・丘)

チヂミザサ

49 ウラナミジャノメ・(少・丘)

イネ科

50 コジャノメ・(普・丘) メヒジワ・チヂミザサ

ススキ

51 ヒメジャノメ・(普・丘) メヒジワ・チヂミザサ

ススキ

52 ジャノメチヨウ・(多・原) ススキ・スズメノカタビラ

53 クロヒカゲ・(普・丘) メダケ・マダケ

54 ヒカゲチヨウ・(普・丘) メダケ・マダケ

55 ヒメキマダラヒカゲ・(少・原)

クマザサ

56 サトキマダラヒカゲ・(多・丘)

タケ類

57 クロコノマチヨウ・(少・平)

ジュズダマ・ススキ

⑧セセリチヨウ科

58 ミヤマセセリ・(少・丘) クヌギ・コナラ

59 ダイミヨウセセリ・(多・丘)

ヤマイモ

60 アオバセセリ・(少・丘) アワブキ

61 コキマダラセセリ・(少・原)

ススキ・イネ科

62 イチモンジセセリ・(多・平)

ススキ・イネ科

63 ギンイチモンジセセリ・(少・平)

ススキ・イネ科

64 キマダラセセリ・(少・原) エノコログサ・タケ類

65 チャバネセセリ・(普・原) イネ・ススキ

「チヨウの保護」

「要するにチヨウの保護に最も有効な手段は、自然開発をやめることである。しかし、文化の進歩の結果として、これをとめることは不可能であるので、結局は、どのようにこの両者の協調をはかるかということである。」

分布の広い種は生息地が各地にあるので、あえて心配の必要はないが、問題は分布の限られた特別の種である。こういうものは、自然開発にあたって十分に考慮されるべきである。国家、あるいは地方自治体は自然開発にあたって、生物学者の意見を参考にしよう指導する義務があると思う。」

(白水陸「チヨウの保護」より)

第十三章 禁伐林

一、箱根山御山組合

(一) 組合設立の沿革

本組合は函南村外三ヶ村御山組合と称し、函南町・三島市旧錦田村・中郷村・清水町をもつて組織され、その対象の土地は函南町地籍（六八三ヘクタール五二六平方メートル）、錦田村地籍（二五六ヘクタール一、六〇三平方メートル）、計（八三九ヘクタール六、八七三平方メートル）の外に宅地（二ヘクタール四九二平方メートル）である。

本組合に関する記録としては、宝永年間入会村内に境界争議の調停書類、及び、享保・明和年間に元君沢郡南江間村・駿東郡日守村の三ヶ村の加入を許可した証憑^{しやうへい}があり、これによると入会村は桑原村外二十二ヶ村となつ

ている。

本組合は、明治二十一年頃までは箱根山尾山組合と称していた。明治六年地券発行に際して箱根山字尾山二十八ヶ村入会秣^{まぐさ}場公有地として韮山県庁に上申・地券の下付を申請した。この二十八ヶ村は、次の通りであつた。

桑原村・大竹村・上沢村・間宮村・塚本村・肥田村・大場村・中島村・梅名村・安久村・御園村・松本村（上下）・長伏村・平田村・堀之内村・玉川村・新谷村・青木村・八反畑村・鶴喰村・多呂村・北沢村・谷田村（東西）・中村・竹倉村・南江間村・北江間村・日守村。

当時地券下付申請について入会村谷田方面より南北分離の主張があつた。

次いで明治十一年十一月組合と軽井沢村と、明治十二年五月田代村と境界紛擾があり、示談の上から二ヶ村が加入し入会村は三十ヶ村となり、続いて明治十三年十一月駿東郡畑中村が箱根山組合より分離して加入し三十一ヶ村となった。

明治十三年三月五日官民有区分に際し、民有地編入の願



禁 伐 林

書を静岡県庁に提出して許可され、ここに現在の御山組合の基礎が確立された。

従って、本組合は、徳川以来、入会山として名目が継続されていたことになる。

この年の十一月十二日に、豆駿三郡三十一ヶ村組合山保護法規約書（明治十七年十月改正）が制定された。尾山の字が御山に改められたのもこの時である。

明治二十三年六月二十四日、豆駿三郡二ヶ村一三字共有御山田畑山林原野維持法組合会規定書を制定した。

明治四十四年十一月七日、行政区画の都合により肥田村地籍四町四反四畝四歩を分割し大字新田を新設したため村数は三十二ヶ村となった。

同年町村制に基づいて、保護法規約書を改正するに際し江間村との争議があり、田方郡長の調停を受け大正四年二月江間村持分を組合に買収決定し、大正十四年、函南村外三ヶ村三〇字の共有地となって今日に至った。

この間において組合員各自の権利義務について明治四十二年に、また大正元年以来組合の持分等について大正二年に、この共有地が法理論上共有権に基づくものか、入会権に基づくものかについて、その他共有地の分割等に関して鑑定が行なわれ、その鑑定に基づいて組合運営上の諸問題の解決を図っていたようである。（後掲鑑定書参照）

（二）組合の組織と事業

組織

1、組合設立の趣旨・法的根拠

各関係町村共有地の共同管理を行なう市町村制に基づく一部事務組合であり、保存登記済である。

2、組合の名称・関係町村

函南村外三ヶ村御山組合。

明治二十三年六月設立。函南村、中郷村、錦田村、清水村。

3、組合の機関及び運営、関係各市町村役場と組合との関係

函南町長、財産管理者となり、理事会を行ない、組合議員は、市町議会が選出するなど地方自治法に基づき、その事務を行ない、慣行を尊重して運営を図り、地域住民の福祉増進を計るにある。

事業

本来は入会村民の^{もど}採取の目的地となっていたが、明治維新の際葦山支庁の論達により開墾を奨励され、入会秣山地内字眞梨及び小谷ヶ沢尻・台崎等数ヶ村が開墾されるに至った。

その後明治二十三年現組合が確立後、貸与規程に基づいて個人に土地が貸与開墾されるようになったが、主として開墾されたのは大正年間のように、現在は、田（五、八三八平方メートル）・畑（一二三ヘクタール九、八九八平方メートル）・耕作者四二〇名となっており、その地料は最高一円五〇銭、最低一円二四銭、平均一円三七銭であった（昭和三十一年調査）。

（三）農地改革と御山組合

御山組合の土地利用は、前述のとおりであるが、戦後の農地改革により、田畑約一二五ヘクタールが開放された。これは、それまでの土地利用により当然開墾地には、すでに慣行耕作権が発生し、それが継続され今日に至ったからである。

この耕作権の売買は、形式的に名義変更の承認をうけてやることになっている。

農地以外の原野は、現在も五五八ヘクタール余が山林に変わりつつある。なお、組合の開墾については、経営

的に限界に達したとみられている。

二、箱根山殖産林組合沿革

本組合は、明治六年地券発行の際公有地入会山林として、公簿に登録し、後、地租改正公布に基づき、箱根山官民有区分の儀、明治十年九月三十日付を以て、静岡県庁へ具申し、明治十三年二月四日付をもって請願のとおりに、全山民有地に裁定された。

この地域は、山林原野反別（二、七四四ヘクタール七、六二九平方メートル）であり、当時所有権を有する村々は、豆駿一宿五十二ヶ村であった。既往の実歴と将来の維持上の都合とを図り、山林反別（八〇三ヘクタール一、一〇一平方メートル）を、東海道を境として南北二部に区分し、北方に属する山林反別（三三九ヘクタール六、五三二平方メートル）及び君沢郡三島地籍の分を、北方一町一村一六大字に分割売却とし、南方に属する山林反別（四六三ヘクタール四、五九一平方メートル）・田方郡函南村桑原地籍の分を、南方二ヶ村一三大字に分割買受けとした。

しかるに、君沢郡江間村は土地が遠隔で、この山林の必要がないので、その所有権を一町一三大字で買い受けた。ところが、この山林は用水源であり、田方郡函南村桑原外七大字及び君沢郡中郷村の内、大場外九大字の田地涵養の關係が大なるため既往の実歴により、山林反別（三一一ヘクタール二、四六〇平方メートル）を水源禁伐林とし、入会外函南村の内、仁田・大土肥・平井の三大字を共同所有に加入し豆駿一村一六大字共有とし、山



アカガシの大木

林反別（一五二ヘクタール二、一三二平方メートル）を殖産林とした。大正四年、函南村肥田を分割し、新田の一大字を新設して、一区を加えた。

水源禁伐林、殖産林ともに昭和四年五月二十九日付を以て、規約改正の許可を得た。昭和十六年四月二十九日、錦田村・三島町を廃し、その区域を以て三島市を置き、市制を施行したので、函南村外三ヶ村禁伐林など殖産林組合を解除し、新しく箱根山禁伐林組合及び箱根山殖産林組合を設定し、今日に至った。

参 考（原生林）

地名地番 地目

面積

一、笛場 一三五七一の内、山林約五八・五ヘクタール

三、箱根山禁伐林組合沿革

本組合は、明治六年、地券発行の際公有地入会林として公簿に登録し、後、地租改正公布に基づき、箱根山官民有区分の儀、明治十年九月三十日付で、静岡県庁へ具申し、明治十三年二月四日付で請願のとおり、全山民有地として裁定があつた。以下資料として「禁伐林組合」の沿革を転載すると、

第十三章 禁 伐 林

「この地は、山林原野反別（二、七四四ヘクタール七、六六三平方メートル）であり、当時所有権を有するものは、豆駿一宿五十二ヶ村だったが、既往の実歴と将来の維持上の都合とを図り、山林反別（八〇ヘクタール一、一〇一平方メートル）を東海道線路を界し、南北二部に区分し北方に属する山林反別（三四〇ヘクタール三、四

三八平方メートル）・君沢郡三島町地籍の分を、北方一町一村十六大字に分割売却とし、南方に属する山林反別（四六三ヘクタール五、九〇二平方メートル）・田方郡函南村桑原地籍の分を南方二ヶ村一三大字に分割買受けとす。しかるに君沢郡江間村の儀は、土地遠隔にして該山林に必要なきを以て、其所有権を一村一三大字に買受ける。しかして該山林は、従来函南村の内桑原・大竹・上沢・間宮・塚本・中郷村の内大場及び組合外函南村の内仁田・大土肥・平井計九大字田地用水の關係大なるを以て既往の実歴により、山林反別三一ヘクタール二、四五九平方メートルを水源禁伐林となし函南村の内仁田・大土肥・平井の三ヶ大字より加入金を領収し、入会に編入し豆駿一村一六大字の共有となす。

右は、明治二十二年二月二十五日所有者一同評決、明治二十三年三月三十一日其の手續きを履行す。後大正四年中肥田地籍を分割して、新田の一大字を新設して一区を加えた。

昭和四年五月二十九日付を以て規約改正の許可を得る。

昭和十六年四月二十九日錦田村・三島町を廃し其の区域を以て三島市を置き市制を施行したるを以て、函南村外三ヶ村禁伐林組合を解除し、箱根山禁伐林組合を設立せんとする所以である。



ブナの大木

参考（原生林）

地名	地番	地目	面積
一、立原	一三七六一	山林	二八ヘクタール 一六一平方メートル
二、大木立	一三四七一	〃	九五ヘクタール二、八五九平方メートル
	一三四七四	〃	一ヘクタール二、五四二平方メートル
	一三四七二	〃	一一ヘクタール五、六五六平方メートル
	一三四五	〃	二、四九九平方メートル
三、北の詰	一三八一一	〃	一三ヘクタール八、八四二平方メートル
	一三八一二	〃	八ヘクタール七、七九五平方メートル

従前の分（昭和二年改正）

函南村外三ヶ村禁伐林組合規約組合規定

第一条 本組合は伊豆国田方郡函南村君沢郡中郷村錦田村駿河国駿東郡清水村を以て組織す。

第二条 本組合村会は函南村の内桑原・大竹・上沢・間宮・塚本・肥田・日守・田代・軽井沢・仁田・大土肥・平井・中郷村錦田村の内谷田竹倉・中・清水村の内畑中の共有総称箱根山南方山村維持法に関する一切の事件を決議するものとす其概目左の如し。

- 一、該山共有林に係る諸費及び夫役現品の賦課徴収法を定むる事
- 二、組合村費を以て支辨すべき事業の事

三、前項の決算報告を認定する事

四、該山共有山林に係る使用料手数料等賦課法を定むる事

五、該山林の売買交換分離譲受ならびに質入書入をなす事

六、基本財産を所置する事

七、該山に係る訴訟及び和解に関する一切の事

八、組合村会規則を設け、ならびに増補改正削除する事

第三条 組合村会に定期ないし議会の必要ある時は何れの時を問わず議長之を招集す。若し議員四分の一以上の請求ある時は又之を招集するものとす。但し開会閉会は各村長より之を報ず。

第四条 会議は公会すと雖も議長の意見又は議員の請求に依り傍聴を禁ずる事あるべし。

第五条 会議の議案は組合管理者より発するものとす。

第六条 組合村会は村長互選を以て管理者一名を置き之を議長と定む。若し議長事故ある時は其命を以て他の村長或は議員中より代理せしむる事を得。

第七条 組合村会議員は其村の村会議員中より互選す其人員左の如し。

議員 五人 中郷村

〃 六人 函南村

〃 二人 錦田村

〃 一人 清水村

計 一四人 一村一六字

第八条 議員は名譽職とす。任期は村會議員と同じ村會議員を退職するを以て之を退職するものとす。

第九条 組合村會議員三分の二以上出席するに非ざれば当日開会するを得ず。

第十条 前後の如く定むと雖も同一の議事及び難差措議件に付招集再会に至るも議員尚三分の二に満たざる時は此の限りに非ず。

第十一条 會議は過半数に依つて決す、可否同数なる時は再議に付し決すべし。尚同数なる時は議長の可否する所に依る。

第十二条 議員中欠員ある時は其選挙区の村長に於て補欠選挙を行なうものとす。

第十三条 議員選挙は其の選挙区村長に於て場所ならびに時日を定め行なうべし。

第十四条 本会に於いて議決せし件は管理村長（即ち議長）之を施行するものとす。但し書記をして議事録を製し議長及び議員五名以上署名捺印すべし。

第十五条 組合村会は議事細則を議定し議場を整理すべし。

第十六条 本組合に常設委員を置く、其の組織は別に条例を以て之を定むるものとす。

四、箱根山組合の沿革追記

函嶺の南面、鞍掛日金の連山西部一帯に広がる藪蒼たる約二二一ヘクタールの大森林地は、往時豆駿一宿五十ニケ村の入会の地なり。

明治維新の初め、先覚小川宗助・大村和吉郎・田中島雄氏等明治八年四月代表者と議り、足柄県に訴願し、続

いて明治十年九月静岡県庁へ具申、遂に静岡県より全山民有地たるの裁定を下さる。時に明治十三年二月なり。

参 考

- 一、小川宗助、現塚本・小川きう氏の三代前の方
- 二、大村和吉郎、現大場・大村和一氏の五代前の方
- 三、田中鳥雄、現大竹・田中和雄氏の二代前の方

三組合議会運営について

議員選出及び議長副議長選出については、旧慣により次の大字より選出される議員に限られている。

一、御山組合議員 函南町定数 四名

二、殖産林組合議員 函南町定数 四名（桑原区一名、大竹区一名、間宮区一名、塚本区一名）

三、禁伐林組合議員 函南町定数 六名（桑原区一名、大竹区一名、上沢区一名、塚本区一名）

四、議長副議長 任期は二ケ年 函南町と三島市（清水町）交互半期交代とし、函南町から選出される議長及び

副議長は桑原区及び塚本区より選出された議員に限られ交互交代制で之に当る。

五、其の他

三島市外五ヶ町箱根山組合議員について

函南町定数四名 桑原区一名、間宮区一名、肥田区一名、田代区（軽井沢区）一名

第十四章 地名

(一) 函南町の地名考

地名は古くから人々の生活に深いかかわりを持った歴史的遺産であつて、発掘される石器、土器や遺跡などにも劣らない大切なものである。というのは、第一にその土地に住む人達の認識の共通の場であること、第二に地名は歴史的、地理的、政治的、生活的ないろいろの要素を持つていて、我々の祖先からの生活史を物語るものである。だから地名をよりどころとして歴史の解明に役立つということが出来る。

地名には市町村名、大字名、小字名など地籍簿に登録されたものの他に俗称とか伝承されている無籍のものが相当あつて案外意味の深いものがある。

(二) 地名の起こり

地名はいつ頃からあるのだろうか。地名が人々の生活に係わりをもっていることから、人が生活を始めたとき

からあるだろう。特に定住するようになってから、生活圏のいろいろの場所に地名がつけられたであろう。

日本書紀や古事記にはたくさん地名起源説話があり、風土記も地名の由来を書くことが目的だったように思われる。政府もまた関心をもっていて、奈良時代に地名に用いる文字は漢字二字にせよとか、佳字を用いよというようなことが命令されている。

このように古くからある地名も、長い歴史の間に変化したものもあるだろうが、千何百年を経た現在までも続いているものもある。

(三) 命名の由来

地名をよくみると、命名のもとになったものがわかる。それを分類すると、(イ)自然環境を表現するもの、例えば洞とか窪、神戸とか落合と言ったもの、(ロ)土地制度や税制・軍事・政治などに関連するもの、坪・免・堀の内など、(ハ)狩猟・魚撈・農耕・共同生活などに関連したもの、例えば沖田・堰戸・天蚕など、(ニ)信仰・民俗・衣食住など生活に関連したもの、例えば子ノ神・観音原・楮畑の如きものである。勿論これらがはつきり独立するものではなくて、互いに重合するものもある。

(四) 漢字の意味に惑わされない

日本には古い時代に文字がなかった。万葉集も中国から渡ってきた漢字を音で当てて書かれている。が同音異字が沢山あって、使用について一定の法則がなかったので勝手に使われて難解にしている。文字より音を主とすると言うことは鎌倉時代の『吾妻鏡』などでも仁田四郎忠常と新田四郎忠常など「仁田」と「新田」を混用して

いる。だから古い地名を考えると、漢字の意味にこだわるとわからないことが多い。

(五) 町内の地名

さて、わが函南町の地名について考察してみたい。

「函南」と言う地名は、明治二十二年に仁田村外十四ヶ村（今の大字）が一つの村になったとき、地域が箱根の南にあるので、箱根の別名函嶺の「函」をとって函南村と命名されたことに始まる。しかしそれ以前から「函南」という意識があつて、明治六年に学校が出来たとき函南学校と命名されている（上巻参照）。

このような由来がありながら函南の名声度は県外で余りにも低く、最近町内に進出して来た企業名をみると、東京セメント三島工場、三島自動車学校、寺岡製作所三島工場、A・A・P三島本部、戸田書店三島函南店などとネームバリューの高い三島を使ったものが多く、別荘地のダイヤランドは南箱根ダイヤランドと箱根を使っている。

(六) 大字名

大字名について、『函南村誌』に次のように記されている。

仁田 『豆州志稿』の記述をもとに「仁田四郎忠常の居住した所から『仁田』と称するに至った」と記されている。また『地名辞典』なども同様に

「仁田四郎忠常」に由来すると記されているがそれは逆で「仁田」の地名が先で、仁田に住んでいたから「仁田四郎」と名乗ったと思われる。



函南駅

仁田は、ぬ（沼）、湿地が水田化された土地、「ぬた」から「にた」、似田、仁田に変化したとも「ニタ」は、アイヌ語の湿地帯の意ともいわれている。仁田は平井原台地が緩やかに田方平野の湿地に没するところで、小字にはドブドブメキのような湿地帯もある。仁田はこの地理的環境から命名されたとみるのがほんとうではないだろうか。

古くは鎌倉時代の大石寺文書に「仁田郡畠村」と郡名として出ているがこの郡は郷の間違いか、郷の意味で書かれたのではないだろうか。近くは明治二十二年に仁田村外十四ヶ村が函南村になったと記録されているように仁田は地理的に函南の中心であると共に仁田大八郎という経済的にも社会的にも優れた人が住んでいてすべての点で函南村の中心的存在であった。

大土肥

日金道の第一の大鳥居のあったところで、その大鳥居が大土肥に変化したのだと言う。

柏谷

柏の木が沢山生えていたからといい、古くは柏の一字だったとも言う。また一説には、「かしいた」土地、つまり傾斜した土地に由来するともいう。

畑毛

由来は不詳であるが、大土肥・柏谷・畑毛・奈古谷は仁田郷に属し仁田と一村であったとも伝えられている。鎌倉時代の大石寺文書、戦国時代の西原文書などにある畠村が今の畑毛に推定されている。

『平井誌』に詳細に記述されているので、その大要を述べたい。

平井

『豆国史記』巻ノ三ノ中平井郷之部（梶尾家文書）には承和元年（八三四）藤ノ公、平井権中将秋兼公が住居を建てたので平井郷と称するようになった。くだって光孝天皇の寛平三年（八九一）ごろ、元仁之王子が平井の地に滞在して阿原見より月を眺めたことから「阿原見の庄、月見ヶ丘」とか、豆州田方郡月見岡阿原見庄

平井郷の地名がつけられたと言う。

『薬王寺古縁起』には、「この村には昔から井戸がなかった。ただ薬王寺の側にだけ井戸があり泉が湧き出ていた。土地は平坦で平井の人たちはこの井戸により生活していた。そのために平井と名づけた」と、またもう一説に昔からの語り草に、薬王寺の前に平な大きな石が置いてあったので「平石」の「し」をとって「ひらい」としたのだとも伝えている。

『吾妻鏡』にも平井郷の名が出ている。このようにいろいろの説があるが、第一の平井権中將が住んだからと言うのは地名が先か、人名が先かと言う間に関連してくる。結論として、『平井誌』は平井台地の平坦であること、泉や小川が付近にあつて住みいい場所であつたことなどから平井の名が起こり、その平井は下平井辺であつてその後、現在地に移つたといっている。

丹那

『豆州志稿』は「谷野」から「たんな」に変化したのではないかと言っている。が棚から変化したと言う説もある。丹那の地形が東に連なる山を背景に棚状であると言うのがこの棚説のもとになっている。

畑

命名の由来は不詳であるが、「旧来畠村の文字を見るに現今火田の字を常用するに至る」と大正元年の『村誌』にみえる。

軽井沢

「昔時軽沢と称せり。或は言う、軽溪は本と溪の名、遂に村名となる。相伝う、源頼朝ここを過ぎし時、遇々渴して水を求む。人あり溪水を汲みて上りしにあな軽き水哉と賞せり。因て軽沢と名付くと。井の字を加うるは其後なり」とある。これは頼朝にまつわる話であつて、この付近の沢は枯れ沢が



田代城址

多く、この枯れ沢から転化したとか、餉沢（カレイザワ）——日金登山の途中のこの辺の沢の端で、昼食の弁当を食べたことからと言う説もある。

田代

田代冠者信綱が住んだからと言う説もあるが、もうこれ以上には田がないと言う地形からきているのではないだろうかと思われる。建武二年（一三三五）足利氏が丹那郷を伊豆山権現に寄進している。又応永六年（一三三九）伊豆山領として丹那郷・田代郷・大竹村・平井薬師堂・間宮荘の名が見える（『丹那地域風土記』より）。

桑原

由来は不詳であるが、禁伐林から付近の山野にかけて山桑が多くみられることに関係あると思われる。鎌倉時代には新居郷に属し箱根権現の神領であり、箱根を大箱根、桑原を小箱根と称したと明治十八

年の『村史』にみえる。

大竹

昔、桑原と一村だったが武田の家臣杉山、栗田、田中らが天目山で敗れ落ちて来てこの地に居住した頃分離し、付近に大きな竹林があったので大竹と称したとある。又、天正十八年の文書には大竹村と記されている。

上沢

古く佐婆郷、沢郷などといわれているが、いずれも沢の意で来光川が落合から沼に流れ込んでその沼の上にあるので上沢と称するようになったのではないと思われる。

間宮

馬宮荘などの古記録もあるが、文字の意味にこだわる必要はない。旧村誌には「此地八幡の古社現存す、相伝え言う。其昔社殿頗る大なりし、源右府蛭ヶ島に謫せらるるや、三島大社参詣の途次每此社に詣つ、距離恰も其中間に位するを以って此の称あるに至れりと」

塚本 守山が塚のような形をしていて、その下にあるからではないかと思われるが、旧記に「塚本の御厨」とあり、名称は相当古いものであろう。

肥田 常識的には狩野川が洪水の度に上流から肥沃な土を運び耕地が肥えていることからだと考えられるが、

反対に運ばれた土が堆積して高くなり、水利が不便になって乾燥しやすくなって水の「ヒル」田に由来すると言いう説もある。

日守 命名の由来は不詳。旧記によれば天正の頃は駿州駿河郡金持庄と言う。後駿東郡に属した。明治二十

二年町村制施行の際本村に入った。

新田 肥田地籍へ日守、原木の人たちが開拓したことからきている。原木新田とか肥田新田と言う人もある。

奴田場 桑原地籍の小字名であるが、その命名の由来は猪の「ぬたくり場」の変化したものと思われる。猪は

箱根山系に沢山生息し、水溜りで泥水を体にこすり付ける習性がある。

(七) 小字名にこそ歴史が宿る

桑原地籍の国見岳は十国峠のある高地である。十国五島が見える山と言うことから命名されたことであろう。今では俗称の十国峠のほうが人々に親しまれている。

十国峠から北へしばらく行ったところに「盗人厩」がある。昔馬盗人が相模で盗んだ馬を駿河、伊豆に売り、伊豆、駿河で盗んだ馬を相模に売っていたが、盗んだ馬を一時飼っていた厩がここにあったのでこの地名が出来たと伝えられている。昭和二十七年四月五日に天皇陛下をお迎えしての国土緑化大会が催された時「駒止め」と

改称されている。

神戸(ゴウド)や落合と言う地名は川と川が合流するところにつけられている。肥田と塚本の境の狩野川べりにある落合(湛水防除の落合機場のあるところ)は来光川が長池や丸池を流れていた当時狩野川に落合うところだったのだろう。

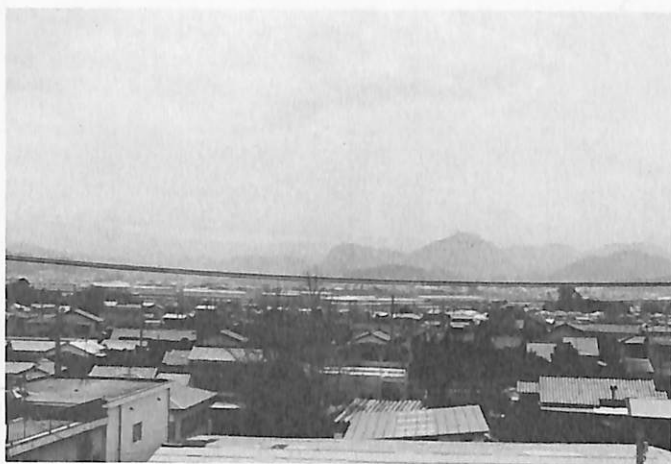
間宮の落合は境川(大場川)と御殿川の合流点にある。桑原川と冷川の合流点の大竹と平井の地名は神戸(ゴウド)であり上沢の方は落合である。落合はオチアウから来て、神戸の「ゴウ」は合(ガツ)するが「ゴウ」する、「ゴウ」するが「ゴウド」に変化したものであろう。

丹那トンネルの西口付近に真奈志(平井地籍)、眞ナシ(桑原地籍)がある。谷下と南谷下の間にある中峰(なかみよ)が終って両方の谷からの溪流が合流する辺りを「しんなし」と言っている。これは溪流がここまで流れて来て断層に出合って地中に流れ込んで、流れが無くなってしまった。つまり、流れの尻がなくなってしまったので「尻無し」と言いその「尻無し」が「しんなし」に変化したのではないだろうか。両方ともに断層の存在が認められる。なおこの二地点を結ぶ線を南に延長した葦山町奈古谷にも新無(しんなし)と言う地名がある。

柏谷の池の尻、丹那の尻戸、軽井沢の沢尻、田代の大橋尻は



神戸と呼ばれる地点



阿原見のある平井原台地

それぞれ盆地の出口、池や沢の出口の地名である。禁伐林の中の池尻は鞍掛山の北麓にあった野馬ヶ池（面積四千坪、深さ一尺）の尻であり、池は現在ゴルフ場の窪地になっている。この野馬ヶ池が来光川の源流である。

『吾妻鏡』にある江尻は宮川の辺りと言われているが、これも平井・上沢・大場の耕地が一つの大きな沼（江）だったころの沼の出口だったのではないだろうか。角川書店の地名大辞典には『吾妻鏡』のこの江尻が清水市の

江尻の項に出ている、説明されている。四郎忠常の妻菊子が三島明神参詣の帰りに清水市まで行くことなどありえないと思う。『豆州誌稿』には狩野川が柏谷と仁田の間を宮川方向に流れていた。

当時狩野川を江川といたので江尻といっているが地形から言って狩野川がこの辺を流れていたとは思われない。なお江川と言う地名は多呂・梅名・長伏にある。

町営キャンプ場の上に子豚野、曲ヶ野、摩我野と言う地名がある。ここは尾根の途中が断層で陥没して尾根の先端が「コブ」のような形になり、陥没した部分は平らな小さい盆地を形成している。そしてその平らなところは曲って、川が蛇行しているので逆川と呼ばれている。この子豚野は「コブタ」、「コブタン」が変化したもの、曲ヶ野、摩我野は共に曲り野の変化したものと思われる。

平井の天蚕の上に老馬と言う小字名がある。土地の人たちは昔

死んだ馬を捨てたところ、馬捨場だったので老馬と言うのだと語っている。しかし神奈川県の川崎市の近隣地域に「ローバザワ」と言う小さな窪地がある。そのほか籠馬台、籠場、牢場などの地名が関東地方に散見される。これはさまざまの字があてられているが、窪地を囲って馬を飼った場所と言う意味では共通している。

平井原台地に阿原見がある。この阿原見の阿原は芦原から転化したもので芦原がよく見えるところの意ではないだろうか。三島市赤王に阿原があり、平井、上沢、大場耕地が浅い沼で芦が一面に生えていた頃命名されたものではないだろうか。柏谷の「アアラ」もこの芦原＝阿原＝アアラからではないだろうか、と考えられる。

塚本に箱根田・伊豆山田、仁田に江間田（今はない）、間宮に桑原田がある。これは箱根権現、伊豆山権現へ寄進された土地の名残ではないだろうか。江間田、桑原田は何を意味するのだろうか。

間宮に夫田という小字がある。これは功績のあった者に田地を賜ったもの、別勅符田から由来したものではないだろうか。功田とか別府、別符、別夫田など類似名が他にもある。

柏谷に沖佃、前佃がある。この佃は名主とか土豪が自家の農耕に当らせた下人や名子に私用として作らせた田のことに由来するのではないだろうか。

町内に鶴のついた地名が三ヶ所ある。鶴と漢字で見るとすぐ鳥を連想するが、これは水流（ツル）から鶴、都留に充てられた



お鶴盤石の滝

ものであろう。「つる」とは水の涸んだところを意味する。塚本の鶴巻田は境川（大場川）の涸んだところ、平井の鶴巻は柿沢川（玄岳川）が勢いよく山を下って来て平地、しかも低湿地に出たところである。今は住宅が建っているが、大雨のたびに水害に悩まされている。水流（ツル）を知っていたならそんなことはなかったであろう。桑原にはお鶴盤石がある。ここは盗人厩の北側の谷間から流れ出て奴田場をくだり小谷ノ沢で来光川に合流するちよつと手前にある。滝があつて、土地の人は「お鶴盤石の滝」と呼び、お鶴という娘が恋に破れて投身した滝と言っている。けれどもここも水流（ツル）と言う「涸み」に由来するのではないだろうか。

大化改新後の条里制の名残りと言われる坪のつく地名は大土肥に坪の内、塚本に上坪、釜ヶ坪、笹ヶ坪の三ヶ所、間宮の伏ヶ坪、鎌ヶ坪、瀬々ヶ坪の三ヶ所がある。田方条理は国府のあつた三島から韭山町の南條までと田京条理からなっているが仁田付近は低湿地が多いので実質的な条理にはなっていなかったのではないだろうか。

仁田に堀之内がある。仁田四郎の屋敷跡という。豪族の率いている武士団は中世の山城や館に付随して環豪集落を形成して住んだ。城下町のはしりとも言うべき中世の農村集落からきたと思われる。堀の内の西に「西の前」がある。豪族が自ら耕した田圃ではないだろうか。堀之内という地名は三島市（旧中郷村）、湯ヶ原町、小田原市下曽我にもある。畑毛には「館」（タテ）の地名がある。

地名と人名のかかわりは非常に多い。先にも述べた「仁田」と「仁田四郎」、「平井」と「平井權中將」、或いは「田代」と「田代冠者源信綱」、「肥田」と「肥田八郎宗直」などあつて人名でその人が住んだから地名が出来たように言われていたが、それらは反対であつて地名が先でそこに住んだから人名が生まれたと考えるのが正しいのではないだろうか。鎌倉時代の人名は大体地名からきているようだ。ただ平井の儀右衛門新田とか畑に沢山ある人名の山は、人名が先であろう。新田の開拓者の名、山の名は所有者の名からのものである。従つてこれらの

名称は新田の開発が盛んに行われた中・近世のもので比較的新しい地名といえる。「子ノ神」と言う地名は柏谷、平井にあり、「子ノ神向」が丹那にある。子ノ神の御神体は男根であつて古くから性器を神聖なものとして祭った信仰の表れである。だからもつと沢山この地名があつてもいいと思われるが当町には三ヶ所しかない。

陳川道（平井）、神賀道（桑原）は両方共両岸に山が迫つた川の付近に命名されているが、由来は良く判らない。

日焼（平井）、「ヒヤケ」（仁田）は古くは天水田であつて干天が続けば水不足で早ばつをうけ、雨が多ければ台地からのヒヤミズでいずれにしても収穫の少ない田につけられている。

宝蔵は柏谷と平井に、蔭宝蔵が柏谷に、御宝殿が桑原にある。これ等は大寺院か大きな神社を想わせるが付近にはその跡らしいものなど発見されていない。

鍛冶ヶ窪は仁田、柏谷、平井の三つの境が合する窪地にある。製鉄場か鉄器を作つた跡ではないだろうか。今のところ遺物は何も出ていない。仁田の初姫神社の末社九社のなかに金山社がある。明治五年の合祀以前の所在は不詳であるが、この付近にあつたのではないだろうか。日金登山の御詠歌に

日金山一の木戸が下平井

久保子童子大権現

金山童子大権現

（以下略）

とある金山はこの金山社と関係ないだろうか。

丹那の小字大山に金山澤がある。古い昔に金を鑄たといわれており、銅の鑄屑が出ると言う。（『丹那地域風土記』

より

四反田から一丁田まで（九反田を欠いている）面積を表わす田の他に向田（仁田・間宮）、押付田（間宮）地持田（チモンダ）（塚本）、塚田（仁田）、小塚田（間宮）、清水田（シミンダ）（仁田）、沖田（柏谷・畑毛）、姥田（畑毛）、砂田（平井）、大田（平井）、井望田（上沢）がある。井望田には間宮の天池のように地下から自然に湧き出る池があつて付近の田圃の用水につかわれていた。

窪、久保は平井、柏谷から西に多く、山間では大竹に八重窪、軽井沢に五ヶ所ある。みな窪地につけられている。洞（ホラ）のつく地名は日守・畑毛・大竹・畑に各一ヶ所、平井・上沢・軽井沢に各四ヶ所、桑原に七ヶ所ある。谷戸と同じように尾根や台地が浸蝕された小さな谷で洞穴ではない。谷戸は洞と同じような地形につけられている。日守・畑毛・畑に一つずつ、桑原四、大竹に五ヶ所ある。

平井の八ッ田は谷津田で小さい谷の田、八ッ面は谷津に面したところではないだろうか。屋敷のついた地名は仁田・間宮・日守に各一、丹那・田代に二ヶ所、肥田に三ヶ所ある。

植物の名のついた地名は花の木が仁田・間宮・日守に、春の木が柏谷にある。松のついたものが一番多く十一ヶ所、柳・桜が五ヶ所、榎・柿・茨・杉・林が各二、笹・楠・柚・萩・をぎ・椿・瓜、「たばこ」が各一ヶ所、木棉が二ヶ所あつて町内一円に分布している。これらの木が生えていたのか、栽培していたことから命名されたのではないだろうか。例外として桑原にあるところの上中下の桜狩はサクラのクラが崖を表わすホロ、ザレ、ガレと同意であることや、大台ヶ原の崑（クラ）などから崖を意味しているのではないだろうか。現場は大きな崖のところに名づけられている。

霜月免（肥田）、天王免（塚本）、杭打免（間宮）、油免（仁田）、粟道免（柏谷）、寒取免（上沢）、井領免（大

竹・桑原)、入用免(間宮)、京免(塚本)、堂免(塚本)、湯治免(塚本)、通り免(田代)のように○○免は新田開墾の為に公租を免除された土地と解されている。町内の分布は塚本、間宮に多く、仁田の油免、大竹の井領免以外は水田である。

石行・負石(柏谷)、兜石(大竹・桑原)、ツブテ石(桑原)、亀石・赤石(平井)、除石・平石・蛇石(畑)、鳴石(田代)、この内柏谷の石行、負石以外はそこに在る石の形態から命名されたように思える。

日守の女坂・男坂については、『函南村誌』『口碑・伝説』の項に次のように記されている。「日守の地籍にして江間村(現伊豆長岡町)との間にあり、源右府の家臣江間小次郎嘗て古池に釣を垂るるや大蛇あり、忽ち池中より現われ若君を呑む。小次郎憤然之れが退治に努む。池底鳴動暫くあつて二頭の大蛇跳り出て、此坂を越え浮島ヶ原に飛ぶ。小次郎無念やる方なく左右に手分けして之を追う。其時女蛇の通りし跡を女坂と言ひ、男蛇の越えし跡を男坂と呼ぶに至ると言う」。

(Ⅷ) 難読・難解の地名

難読・難解の地名は間宮に一番多く、塚本・桑原がそれに続く。成無し、虫振、赤狩、粟彦、正方、本狩又、縦狩又、横狩又、道清、夫田、以上間宮。楽徳(ラクトコ)、保亭(ボテイ)、高大縄(タカオウナ)、これは韭山町原木にもある。小奴婦(コソブ)、この小奴婦は「ゴドブ」のことで小さな「どぶ」、ドブドブした湿地の窪地につけられ現地は大場川の岸にあつて流路の変化によって出来たところである。これは当て字の見本とも言うべきものであろう。

平井、大竹、軽井沢にある浜井場も難解であるが梶尾嘉十郎は破摩矢を射た信仰の場所と解していた。その他

に桑原の初才毛、金龍地、御番埴、乗埴、香音、平井の根場、上沢の下人原、藤明、井望田なども難解である。

(九) 伝承地名

地籍簿に登録されていない地名がかなりあつて、歴史的な資料となつてゐる。平井原と仁田の人々が呼んでゐるのは楠の台、中道、鍛冶ケ久保、萩ケ窪などで、面白いことに平井の人々はこの地域を仁田原と言ひ、通信病院からその正門前の地域を平井原と呼んでゐる。

仁田で観音原とは油免、大土肥境の地域で時代は不詳であるが昔普門寺や全得寺などの観音堂があつたからだと言ふ。この観音原の一段下を観音下と言つてゐる。大土肥境の一部を八幡前と呼ぶ人もある。三島宿、小田原宿も葦山と三島を結ぶ三島街道、葦山と小田原を結ぶ小田原街道（葦山往還）が通つていたときの名残だといふ。仁田の五反田から大土肥に下る坂を仁田坂と言ひ仁田坂遺跡のあるところ。仁田の宮下は「ひやけ」と言ひ前述の通りである。函南小学校とハツ溝の間を郷分と言つてゐる。

南谷下の畑毛寄り（〇七百四拾一番地）に御料地と呼んでゐる仁田、大土肥、柏谷、畑毛の関係者の共有地がある。これは仁田大八郎外六名の名儀（関係字からの代表者）の共有地である。明治維新の際、一旦国有地となつたが明治四十年九月十日、当時官有地第三種であつたのを特売規定により代金一、六一五円で払下げられた。各字の権利者には持分権確認之証が渡されてゐる。

面積 山林 九二町六反七畝二一歩

原野

八反六畝一〇歩

畑毛の上に六本松がある。樹齡數百年の松の大木があつたが落雷などで二、三本になつてしまつた。鬻ノ沢の



天 蚕 (平井)

平和病院の下に五本松がある。松の大本が数本群生している。桑原の月光天文台の下に三本松がある。そこに一本の松があつて樹齢数百年と言われていたが松喰虫の為に枯れて伐られてしまった。南から六・五・三と松の地名が伝承され葦山城と山中城間の烽火台のあったところとも言われている。

平井の天蚕の登録地名は御座松だけれど、明治の初年に田中鳥雄、大井慧七郎、梶尾嘉十郎等が天蚕飼養所をつくったことから天蚕と言う地名が生まれバスの停留所名にもなっている。仁田山は仁田大八郎の所有になってからで、それ以前は仁田五反田の地主が所有して五反田山と言っていた。塚本の飛び地である元作り、東松ノ木田、七反田、諸星の一区画は大土肥下田と呼ばれている。大土肥とは大分離れているが何か理由でもあるのだろうか。柏谷の池の内は「ああら」と呼ばれて浮島ともいうべき湿地であつた。禁伐林の子豚野の上に逆さ川がある。断層の跡でもある。他にも伝承地名が沢山あるがそれぞれ意味深く人々に親しまれている。

(十) 歴史に現われた地名

万葉集には当町に関する地名は無いが、箱根、足柄、伊豆、湯ヶ原町に比定されているところの土肥の河内の

地名がみえる。

鎌倉幕府の日記『吾妻鏡』には、治承四年八月十七日、頼朝の山木攻めの折、「茨木北行到肥田原——牛鞆大路」とあり、攻撃軍の一隊が原木を北行し肥田原（今の新田）から牛鞆大路（一色から長崎を経て多田）へという記事がある。同じ年の八月二十四日の項には早くも石橋山の合戦で負けて敗走する北条宗時が「桑原経平井郷之処於早河辺……小平井名主紀六久重云々」とあつて桑原と平井郷の地名がみえる。

文治三年七月十八日の項には江尻の渡しで仁田四郎忠常の妻が溺死した記事があつて、この江尻の渡しは現在の宮川の辺に比定されている。

弘長三年六月八日付の「尼妙法讓状」（大石寺文書）には仁田郡畠村くりき、河島、たてのうしろ、をき、しはさき、小松沢、大ゆやさわしり、はんのき、ねきし、ひけひたし、あふきた等の地名が見られる。畠村は今の畑毛と推定される。畠は白田であつて白は乾いたことを意味し田は耕地の形を表わしている。

畑は火田であつて焼畑を意味する。この仁田郡は、郡と記されているのはこれだけであつて郷の誤りか郷の意味で書かれたのではないだろうか。当時仁田郷の範囲は仁田、柏谷、畑毛、奈古谷だったのだろうか。

文政九年の川口家年代記の明和五年の条に、いや下おおむ石見分と谷下をいや下と記している。

天正十八年の豊臣秀吉の定書（新井文書）には肥田郷、塚本郷、間宮郷、沢郷、安久郷、多呂郷、北沢郷、中島郷、梅縄村が見える。

永禄六年西原源太への北条家知行朱印状（西原文書）には仁田郷の名がみえる。同十二年、天正十三、十四年の北条家朱印状（森文書）には桑原郷の地名がみられる。

(二) 地名の変化

地名は人の生活とともに発生して千何百年も変わらずにあるものと、社会の変化、自然環境の変化に伴って変化したものがある。畠村も畑毛に変化している。畠が畑にしかも毛が付けられている。この畑毛は旧中郷村の小字名の中にも使われている。

(三) 無くなつた地名

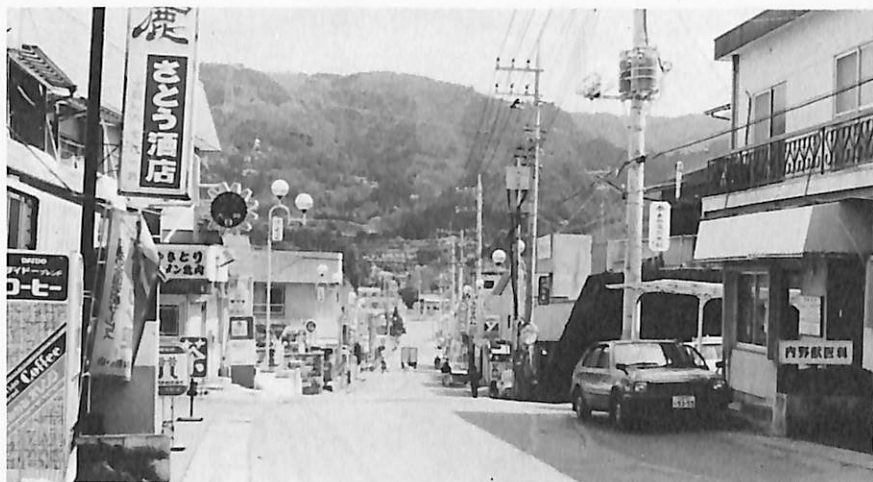
仁田の江間田と言う地名は耕地整理の為になくなった。大土肥の下島合、上島合、一丁田も耕地整理の際に坪ノ内や八ツ溝に吸収されてなくなつた。

塚本の東折上、清水、箱根畑、南袋も河川の改修や耕地整理の為に無くなっている。今後河川の改修や現代の検地とも言ふべき地籍調査、農業の圃場整備などが行なわれ地名が失われやすい。その際、出来るだけ地名が残るよう努力すべきである。

(四) 新しく出来た地名

失われる一方で新しい地名、特に新興住宅地に佳字を使った地名が生まれる。当町で第一に生まれたのが新幹線区である。上沢の反畑、藤明に新幹線の工事に従事する人々の官舎が出来て新しい行政区として新幹線とよばれ、工事が終わって工事に従事した人達が去つたあとにも新幹線区名は残っている。

高度経済成長になって当町が三島、沼津、熱海のベッド・タウンになつた昭和四十年代に日本電建が柏谷の蔭



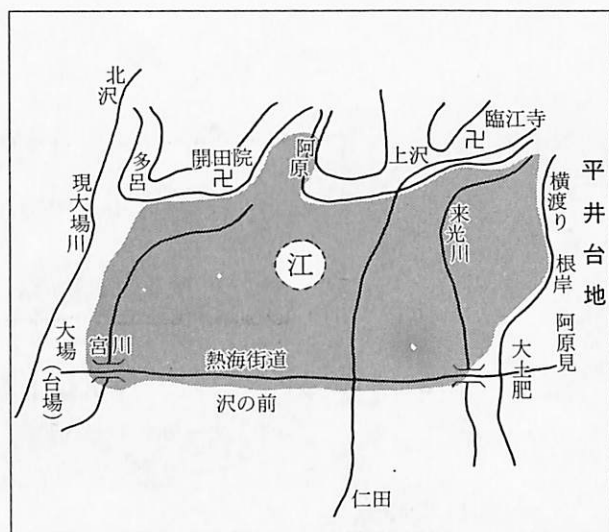
新興団地・柏谷宝蔵台

宝蔵に宝蔵台団地を開発した。白道坂区も同時期に仁幸建設が開発した。続いて積水ハウスが平井の鶴巻、向山に柿沢台を、東海自動車が柏谷城山に住宅団地城山を開発した。その後畑毛の荒神道付近に富士見ニュー・タウンが、上沢の南方協会跡に上沢団地が続々と誕生した。谷下には別荘地「南箱根ダイヤランド」が、上沢の笹洞、石原地区には別荘兼高級住宅地として「パサディナ」が大都によって開発された。

(四) 「江尻の渡」考

江尻の渡は間宮、宮川の辺りと比定されていて当時狩野川が柏谷と仁田の間を流れ、この宮川のあたりへ来ていたと『豆州誌稿』にあるけれど、狩野川が流れていたとは地形上考えられないことである。では大雨で渡舟が転覆する程の流れをどう考えたいのか。江尻の渡はどこか他所であったのだろうか。仁田と三島とを結ぶ道といえはこの辺りと考えるのが適当であろう。

大雨で水が溢れる為には大場川が大場の東側を流れていれば可能になる。そこで付近の地名を調べてみると「北沢」がある。



北沢のあたりから多呂を通って大場の東側を流れる。北沢の北は南に対して北である。では南にながったのだろうか。北沢と言えば上沢と関連があるだろう。上は何かに対して上であるはずである。そこで次の図を参考に考えてみたい。ここに大きな沼(江)があった。その北から流れこむ沢、大場川を北沢、上から流れ込む川(来光川)を上沢とすれば水量は多くなる。江のあった証として周囲の地名をみると、赤王の開田院がある。江の岸から開田院といった名残ではないだろうか。上沢に臨江寺と言う寺がある。寺の境内からの平井、上沢、

大場耕地の眺めはまさに臨江である。

平井に横渡りがある。江の横を渡るところからきているのではないだろうか。根岸がある。平井台地の根で江の岸に当るから根岸ではないだろうか。台地の上に阿原見がある。江が上流からの土砂によつて浅くなり芦が生えて芦原が次第に多くなった当時命名されたものではないだろうか。江の南岸は今の熱海街道通りではないだろうか。仁田の沢の前は大場耕地より高くなっている。

なお、平井の根岸の主人は「うちの田圃の一メートル程下には芦の根のようなものの層がある」と言っている。

ここが大きな沼(江)だったとすれば『源平盛衰記』にある「北条次郎宗時は波打ちぎはを云々」の波打ちぎわは、真鶴の汀ではなくてこの江の波打ちぎわであろう。もともと『源

『平盛衰記』はあとから書かれた物語であるから史実の上で『吾妻鏡』の記録とは軽重があるだろう（資料・田中
悟氏による）。

(註) 函南町小字名

大字「仁田」の部

第十四章 地名

ハツ溝	ヤツミゾ	一…一四	榎田	エノキダ	…一八一、一八五、一九五、 一九六
沢之前	サワノマエ	一五…三七	樋場	トエバ	…一九四、一九七…二〇〇
花之木	ハナノキ	三八…七二	川成	カワナリ	二〇一…二二二
向田	ムカイダ	七三…九四			二二三、二二四、二二六
塚田	ツカダ	九五…一二二	久保田	クボタ	…二二九、二三一…二三三
西之前	ニシノマエ	一二三、一二四、一三六、 一四一			二三四…二五一の三、二 七〇…二七〇の四、二七一 の二、二七一の四…二七六、 二八〇、二八二…二九三
森之腰	モリノコシ	一二五…一三五、一三九、 一四二、一四三	宇和畑	ウワバタ	二五一の五…二六九、二 七〇の五、二七一の二、二 七九の三、二九四…二九七
堀之内	ホリノウチ	一三七、一三八、一四八 …一六七			
外真	ゲイシン	一四四…一四七、一六八			

道玄

ドウゲン

二七六の三…二七九の二、

土橋

ツチハシ

二七九の四、二八一
三〇二の二、三〇五の二、

牛飼

ウシガイ

三二七…三三三
三三四、三三五、三五一

古屋敷

フルヤシキ

…三七五
三三六…三四一、三七六

清水田

シミンダ

…三九四
三四二…三五二

長塚

ナガツカ

三九五…四〇六

溝崎

ミゾサキ

四〇七…四二三

南養島

ナンヨウジマ

四二四…四四三

田中前

タナカノマエ

四四四…四六四

どぶどぶめき

ドウドメキ

四六五…四八二、四八四
…四九四

小田中

オダナカ

四九五…五〇九

三中

サンナカ

五一〇…五二九

橋之前

ハシノマエ

五三〇…五四一

五反田

ゴタンダ

五四二…五六一

町屋

マチヤ

五六二…五八四、五八七

宮下

ミヤシタ

…六一三
六一四…六六五

油免

アブラメン

六六六、六六七、六六九

萩ヶ窪

ハギガクボ

…六九四
六九五…七三二

鍛冶ヶ窪

カジガクボ

七三三…七五七、七六〇、

楠ノ台

クスノキノダイ

七六一
七六二、七六四…七八六

仲道

ナカミチ

七八七…八〇六

大土肥境

オオドイザカイ

…八四二
八〇五、八〇六、八〇八

大字「大土肥」の部

石原

イシハラ

一…二一

八ッ溝

ヤツミゾ

二二…五五、五七…六三、

第十四章 地名

久保之前	クボノマエ	七〇…一一〇、一一二…	六四の二、六五…六九
久保	クボ	一三六…一六三	
上之段	ウエノダン	一六四…一七〇、一七二…一八一	
狐塚	キツネヅカ	一八二…二〇七	
松並	マツナミ	二〇八…二二二、二二五…二二八	
下之畑	シモノハタ	二二九…二四一	
坪ノ内	ツボノウチ	六四の一、六四の三、二四二…二七一	
川崎	カワサキ	九八、九九	
西柏谷原	ニシカシヤバラ	一…四九	
鍛冶ヶ窪	カジガクボ	五〇…五四、五六…七三、	
大字「柏谷」の部			
南養	ナンヨウ	八五…一〇七	七六…八四
中寺尾	ナカテロウ	一〇八…一四四	
中宿	ナカジク	一四五…一六七	
若宮	ワカミヤ	一六八…一九五	
寺尾	テロウ	一九六…二四一	
寺尾原	テロウバラ	二四二…二五七、二五九…二七四、二七六…三一八、	
西ヶ久保	ニシガクボ	三〇一…三〇九	三一九
石行	イシュキ	三一〇…三一七、三二〇…三二六	
春の木	ハルノキ	三二七…三三一	
下丸橋	シモマルバシ	三三二…三三七	
上丸橋	カミマルハシ	三三八…三四四	
春ノ木		三四五…三五三	
上丸橋		三五四…三五八	
寺尾		三六一…三七三	

木戸	キド	三七四…三七七、三八〇
		…三八三、三九六…三九八、
		四〇一、四〇三…四〇四下
下丸橋		三五九、三六〇
上丸橋		三七八、三七九
負石	マケイシ	三八四、三八六…三九二、
		四〇二
向原	ムカイバラ	四〇五…四四四
寺尾		三八五
六万部	ロクマンブ	四四五…四八一
松ヶ崎	マツガサキ	四八二…四八七
畔無	アゼナシ	四八八…五〇五
嶋合	シマアイ	五〇六…五一六
沖佃	オキツクダ	五一七…五三〇
前佃	マエツクダ	五三一…五四一
五反田	ゴタンダ	五四二…五五五
粟道免	アワドウメン	五五六…五六九
沖田	オキダ	五七〇…五八〇

八反田	ハッタンダ	五八一…五八五
木棉田	モメンダ	五八六…五八九
壺丁田	イツチヨウダ	五九〇…五九六
宮田	ミヤダ	五九七…六一六
溝下	ミゾシタ	六一七…六二四
池之尻	イケノシリ	六二五…六六六
池之内	イケノウチ	六六七…六九二
山崎	ヤマサキ	六九三…七〇六
内田	ウチダ	七〇七…七二二
城山	ジョウヤマ	七二三
池頭	イケガシラ	七二四…七九一
向山	ムカイヤマ	七九二…八一六
負石		八二〇…八四三、八四八
流川	ナガレガワ	八四四…八四七、八四九
		…八六八、八七〇、八七一
東町	ヒガシチョウ	八七二…九二一
子ノ神	ネノガミ	九二二…九五〇、九五三
		…九七八

第十四章 地名

湯塚	焼田	川島	沖田	西	北側
ユツカ	ウバダ	カワシマ	オキダ	ニシ	キタガワ
一九一…二二三	一七〇…一九〇	一二一…一六九	七〇…一二〇	一四…六九	一…一三

大字「畑毛」の部

宝蔵	蔵ヶ窪	前清水	城山下	堰戸	沖清水	切通	大橋	蔭宝蔵
ホウゾウ	ゾウガクボ	マエシミズ	ジョウヤマシタ	セギド	オキシミズ	キリドウシ	オオハシ	カゲホウゾウ
九七九…一〇五一	一〇五三…一一〇〇	一一〇一…一一九〇	一一九一…一二一九	一二二〇…一二二四	一二二五…一二六六	一二六七…一二八四	一三〇五…一三二三	一三二四…一三四四

元会ヶ	南荒古	大洞	六地藏	宮ノ入	城ヶ下	会ヶ山田	荒神道	谷戸	下笹原	一色	会ヶ谷	前田	迎向	館	上城ヶ下	打越	沖城ヶ下
モトエゲ	ミナミアラク	オオボラ	ロクジゾウ	ミヤノイリ	ジョウガシタ	エゲヤマダ	コウジンドウ	ヤト	シモササハラ	イシキ	エゲヤ	マエダ	ムカエムキ	タテ	カミジョウガシタ	ウチコシ	オキショウガシタ
六三八…六四四	六三二…六三七	六三〇…六三一	六二二…六二九	六〇六…六二一	五九五…六〇五	五八二…五九四	五七三…五八一	五七二	五四九…五七一	五〇六…五四八	四七三…五〇五	四四九…四七二	三九二…四四八	三三四…三九一	二九〇…三三三	二七三…二八九	二二四…二七二

大字「平井」の部

古沢	コザワ	六四五…六四六
水上	ミズカミ	六四七…六四八
荒神道山	コウシンドウヤマ	六四九、六五〇
谷戸山	ヤトヤマ	六五二…六六六
平戸	ヒラド	六六七…六七七
下笹原山	シモササハラヤマ	六七八…六九〇
上笹原	カミササハラ	六九一…六九七
畑毛山	ハタケヤマ	六九八
会ヶ谷山	エゲヤヤマ	六五一
岩山	ユワヤマ	六九九
真奈心	シンナシ	一…三、一七四、一七五
山田	ヤマダ	四…一一
新林	シンバヤシ	一二…一五
神戸	ゴウド	一六…三六
Q、一七五二		

横渡	ヨコワタリ	三七…四三
赤坂	アカサカ	四四…七三
宿通	シュクドオリ	七四…一一九
八ツ田	ヤツダ	一二〇…一六一
八ツ面	ヤツメン	一六二…一八六
来光	ライコウ	一八七…二〇八
大道上	オオミチウエ	二〇九…二三六
久保堂	クボドウ	二三七…二六一
大道下	オオミチシタ	二六二…二九五
根岸	ネギシ	二九六…三二〇
浜井場	ハマイバ	三二一…三五五
向原	ムカイバラ	三五六…三九二
日焼	ヒヤケ	三九三…四三七
砂田	スナダ	四三八…四五八
柳場	ヤナバ	四五九…四八四
太田	オオタ	四八五…五二八
天神下	テンジンシタ	五二九…五六二
十二天	ジュウニテン	五六三…六三二

第十四章 地名

下平井	シモヒライ	六三三…六七八
鍛冶窪	カジヤガクボ	六七九…七一七
阿原見	アバラミ	七一八…七七四
子ノ神	ネノガミ	七七五…八三二
南原	ミナミハラ	八三三…八六一
小池洞	コイケボラ	八六二…八九二
宝蔵	ホウゾウ	八九三…一〇一〇
原	ハラ	一〇一一…一〇七九
宮ノ前	ミヤノマエ	一〇八〇…一一二四
久保	クボ	一二二五…一一五〇
御堂山	ミドウヤマ	一二五一…一一五七
駒形山	コマガタヤマ	一二五八…一二六五
駒形	コマガタ	一二六六…一九四
折下り	オリクダリ	一一九五…二〇〇、一
田ヶ久保	タガクボ	二〇一…一二〇三欠番
白道坂	シロミチザカ	一二〇四…一二四七
鶴巻	ツルマキ	一二四八…一二八二
		一二八三…一三二七

陣川道	ジンガドウ	一三二八…一三四〇
松沢	マツザワ	一三四一…一三四九
松沢後	マツザワウシロ	一三五〇…一三六九
向山	ムカイヤマ	一三七〇…一三七六
溜り池	タマリイケ	一三七七…一三八八
虎杖洞	イタドリボラ	一三八九…一四一一
台崎	ダイサキ	一四一二…一四二四
赤坂上	アカサカウエ	一四二五…一四三四
山神前	ヤマノカミマエ	一四三五…一四四四
見曾萩	ミソハギ	一四四五…一四四八
下山田	シタヤマダ	一四四九…一四七三、一
根場	ネンバ	七四二
柿沢	カキザワ	一四七四…一五〇〇
御座松	ゴザマツ	一五〇一…一五三四
老馬	ロウバ	一五三五…一五六〇
大阿原	オオアラ	一五六一…一五九四
光ヶ淵	ヒカリガフチ	一五九五…一六二〇
		一六二一…一六四六

猪穴 ムジナアナ 一六四七…一六四九

儀右エ門新田 ギエモンシンデン 一六五〇…一六五二

皆畑 ミナハタ 一六五三…一六五九

鬻之沢 ビンノサワ 一六六〇…一六七二

石上洞 イシガミボラ 一六七三…一六七九

鬻之沢上 ビンノサワウエ 一六八〇…一六八五

井戸尻 イドジリ 一六八六…一六八七

茶湯水 チャトウスイ 一六八八

境塚 サカイヅカ 一六八九

中野 ナカノ 一六九〇

亀石 カメイシ 一六九一

松峯 マツミネ 一六九二…一六九三

五本松 ゴホンマツ 一六九四…一六九五

日蔭 ヒカゲ 一六九六…一七〇一、一

七四四、一七四六…一七四

九、一七五一

雨堤 アマツツミ 一七〇二…一七〇六

赤石 アカイシ 一七〇七…一七〇九

堂川 ドウガワ 一七二〇…一七二一

皆畑後 ミナバタウシロ 一七二五…一七二八

皆畑前 ミナバタマエ 一七二九

細沢 ホソザワ 一七二〇

山犬洞 ヤマイヌボラ 一七二一…一七二二

南堂川 ミナミドウガワ 一七二三

笹原洞 ササハラボラ 一七二四…一七二五

水香場 ミズノミバ 一七二六…一七二九

谷下 ヤシタ 一七三〇…一七三九

南谷下 ミナミヤシタ 一七四〇…一七四一、一

七五三

大字「丹那」の部

子ノ神向 ネノガミムコウ 一…二七

川島 カワシマ 二八…三七

北中 キタナカ 三八…七四

南中 ミナミナカ 七五…九九

第十四章 地名

後口田	ウシロダ	一〇〇…一四五
新山	ニイヤマ	一四六…二二〇
紺屋ノ下	コンヤノシタ	二二一…二四一
尻戸	シリド	二四二…二五六
西方	ニシカタ	二五七…三一八
町田	マチダ	三一九…三六四
横田	ヨコタ	三六五…三八二
石原田	イシハラダ	三八三…四二二
瀧沢	タキザワ	四二三…四五七
下赤坂	シモアカサカ	四五八…四六六
名賀	ミヨウガ	四六七…五一六
南平沢	ミナミヒラサワ	五一七…五二三
西六万部	ニシロクマンブ	五二四…五二九
上赤坂	カミアカサカ	五三〇…五三五
峠山	トウゲヤマ	五三六…五三八
東六万部	ヒガシロクマンブ	五三九…五四三
北平沢	キタヒラサワ	五四四…五四七
長崎山	ナガサキヤマ	五四八…五五一

香屋敷	コオヤシキ	五五二…五六三
柚塚	ユヅカ	五六四…五八六
名賀田	ミヨウガダ	五八七…六三五
寺之上	テラノウエ	六三六…六六一
横道下	ヨコミチシタ	六六二…六八八
背戸山	セドヤマ	六八九…七〇四
宮之上	ミヤノウエ	七〇五…七四八
桜方	サクラガタ	七四九…七八五
前中野	マエナカノ	七八六…八〇〇
奥中野	オクナカノ	八〇一…八一二
上山口	カミヤマグチ	八一三…八五一
中峯	ナカミネ	八五二…八六七
丸山	マルヤマ	八六八…九〇五
姥屋敷日向	ウバヤシキヒナタ	九〇六…九二三
姥屋敷	ウバヤシキ	九二四…九七三
下丹那	シモタンナ	九七四…一〇一九
中峯日蔭	ナカミネヒカゲ	一〇二〇…一〇三八
下山口	シモヤマグチ	一〇三九…一〇八三

山口	ニシヤマガチ	一〇八四…一〇九八
七曲り	ナナマガリ	一〇八九…一一〇七
下日蔭	シモヒカゲ	一一〇八…一一一八
中日蔭	ナカヒカゲ	一一一九…一二二九
向畑毛	ムコウバタケ	一一三〇…一一六七
上日蔭	カミヒカゲ	一一六八…一一八六
高杉	タカスギ	一一八七…一二九三
堂川	ドウガワ	一二九四…一二一三
笹林	ササバヤシ	一二一四…一二五一
山路	ヤマジ	一二五二…一二六五
坊主山	ボウズヤマ	一二六六…一二八三
大山	オオヤマ	一二八四…一二九六
一ノ沢	イチノサワ	一二九七…一三一一
堤ヶ上	ツツミガウエ	一三一二
向山	ムコウヤマ	一三一四…一三一六
峠野	トウゲノ	一三一五

大字「畑」の部

畑	ハタ	一…九
後畑	ウシロバタ	一〇…三四
檜沢	ヒノキザワ	三五…四七
カラ沢	カラサワ	四八…六二
上ノ山	ウエノヤマ	六三…七九
畑ノ後	ハタノウシロ	八〇…八三
寺ノ下	テラノシタ	八四…八七
山路	ヤマジ	八八…九五
藪ノ畑	ヤブノハタ	九六…一〇八
瀧沢	タキサワ	一〇九…一三〇
瀧沢不動前	タキサワフドウマエ	一三一…一四四
瀧沢川向	タキサワカウムコウ	一四五…一四六
ドラメン	ドウメン	一四七…一五七
入口	イリグチ	一五八…一六八
道添	ミチゾエ	一六九…一七五
下ノ後	シモノウシロ	一七六…一八三

第十四章 地名

寄居	ヨリイ	一八四…一八九
下方	シモカタ	一九〇…一九七
下ノ前	シモノマエ	一九八
青木ノ元	アオキノモト	一九九…二〇二
砂田	スナダ	二〇三…二〇八
畑田	ハタダ	二〇九
山ノ神道	ヤマノカミドウ	二一五…二二五
幸ノ神道	サイノカミドウ	二二六…二三四
谷戸	ヤト	二三五…二四七
上乙越	カミオツコシ	二四八…二六六
馬道上	マミチカミ	二六七…二八四
馬道下	マミチシタ	二八五…二九五
出口	デグチ	二九六…三〇五
トヒツメ		三〇六…三二五
下乙越	シモオツコシ	三二六…三四一
水頭	ミズガシラ	三四二…三四三
丸山	マルヤマ	三四五
上左右衛門山	カミモクエモンヤマ	三四六

仲ヶ原	ナカガハラ	三四七
長畑	ナガバタケ	三四八、三四九
乙越	オツコシ	三五〇…三五五
平林	タイラバヤシ	三五六…三六〇
一ノ沢	イチノサワ	三六一…三七三
下ノ口ノ木	シモノクチノキ	三七四
上ノ口ノ木	カミノクチノキ	三七五…三九〇
畑毛尻	ハタケジリ	三九一…四〇二
五左エ門山	ゴザエモンヤマ	四〇三
山ノ寺	ヤマノテラ	四〇四…四一〇
チマツ		四一一
朝河原	アサガワラ	四二三…四二七
水頭山	ミズガシラヤマ	四二八…四三三
押出河原	オシダシガワラ	四三四…四四九
松ヶ下	マツガシタ	四五〇
大洞山	オオボラヤマ	四五一…四五四
上小屋沢	カミコヤノサワ	四五五…四五八
下小屋沢	シモコヤノサワ	四五九…四六一

トヅル久保	トヅルクボ	四六二：四六七
治右エ門山	ジエモンヤマ	四六八：四六九
木道	キミチ	四七〇、四七一
半兵衛山	ハンベイヤマ	四七二：四七三
山路山	ヤマジヤマ	四七四：四八一
久助山	キユウスケヤマ	四八二
コガシバ		四八四：四八六
下ジゴク沢	シモジゴクザワ	四八七：四八九
上ジゴク沢	カミジゴクザワ	四八九
平石	ヒライイシ	四九〇
ノゾキ石	ノゾキイシ	四九一、四九二
丸山上	マルヤマカミ	四九三、四九四
平蔵山	ヘイゾウヤマ	四九五
上奎右エ門山	カミモクエモンヤマタイラ	四九六：四九九
下奎右エ門山	シモモクエモンヤマタイラ	四九六：四九九
仲河原山	ナカガワラヤマ	五〇一：五一五
長畑ヶ山	ナガハタケヤマ	五一六、五一七

細ノ沢	ホソンザワ	五一八
磯右エ門山	ギエモンヤマ	五一九：五二二
溝返り	ミゾカエリ	五二二
大崩	オオクズレ	五二三
猪越	イノシシゴエ	五二四
萱場	カヤバ	五二五
玄岳	クロダケ	五二六
小草切	コクサギリ	五二七
向山	ムコウヤマ	五二八
ドンドメキ		四二二：四二二
棚ノ沢	タナノサワ	四八三
大洞	オオボラ	三四四

大字「輕井沢」の部

東久保	ヒガシクボ	一：一〇
石休場	イシヤセンバ	一一：一八
細原	ホサハラ	一九：五〇

第十四章 地名

古草	フルグサア	五一…六二
向畑毛	ムカイバタケ	六九…七二
大沢里	オウソウリ	七三…一七五
市久保	イチクボ	一七六…一九六
平沢	ヒラサワ	一九七…二〇五
下之沢	シタノサワ	二〇六…二一一
荻久保	オニクボ	二一四…二二六
木綿アラク	モメアラク	二二七…二三〇
西久保	ニシクボ	二三一…二三四
上冷川	カミヒエカワ	二三六
下冷川	シモヒエカワ	二三七…二四二
冷川	ヒエカワ	二四三…二四四
太鼓コロガシ	タイコロガシ	二四五
一盃水	イツパイミズ	二四六
平沢山	ヒラサワヤマ	二四七…二四九
市久保山	イチクボヤマ	二五〇…二五三
笹ヶ久保	ササノクボ	二五四
下之沢山	シタノサワヤマ	二五五…二六三

荻久保山	オギクボヤマ	二六四、二六五
大橋山	オオハシヤマ	二六六
片側	カタガワ	二六七…二七二
沢尻	サワシリ	二七三…二七七
土橋	ドバシ	二七八…二七九
木綿アラク山	モメアラクヤマ	三〇〇…三八〇
大桜	オオザクラ	二八一、二八二
池ヶ	イケ	二八三
向畑毛山	ムカイハタケヤマ	二八四…二九四
浜井場	ハマイバ	二九五
ナイ竹山	ナイタケヤマ	二九六…三〇〇
西久保山	ニシノクボヤマ	三〇一…三〇二
箕洞	ミボラ	三〇三…三〇五
立洞	タテボラ	三〇六、三〇七
細道	ホソミチ	三〇八、三〇九
入道	ニュウドウ	
古草山	フルグサヤマ	三一二…三一五
不動洞	フドウボラ	三一六…三一八

水口 ミズグチ 三一九

タラノ木洞 タラノキボラ 三二〇

石休場山 イシヤスミバヤマ 三二一…三二六

赤坂 アカサカ 三二七

大沢 オオサワ 三二八、三二九

源内端 ゲンナイバタ 三三〇

大平 オオビラ 三三一

東久保山 ヒガシクボヤマ 三三二、三三三

大沢里山 オオソウリヤマ 三三四…三三七

弦巻山 ツルマキヤマ 三三八、三三九

新林山 シンバヤシヤマ 三四〇

駒形上 コマガタウエ 三四一

駒岳 コマガタケ 三四二

大字「田代」の部

田屋敷 タヤシキ 一…一〇二

通り免 トオリメン 一〇三…一二七

駕籠立場 カゴタテバ 一二八…一六二

石荒田 イシアラダ 一六三…二二〇

鳴石 ナリイシ 二二一…二八六

滝ノ前 タキノマエ 二八七…三二六

笹林 ササバヤシ 三二七…三三二

大平 オオビラ 三三三

道場屋敷 ドウジョウヤシキ 三三四

鳴石山 ナリイシヤマ 三三五…三三七

押上山 オシアゲヤマ 三三八…

山畑毛 ヤンバタケ 三三九…三四四

松峯 マツミネ 三四五

太田原 オイダワラ 三四六…三五四

ウシロ山 三五五、三五六

背戸山 セドヤマ 三五七

寺山 テラヤマ 三五八…三六一

細原向 ホサワラムコウ 三六二

瓜畑毛 ウリバタケ 三六三…三六七

向山 ムカイヤマ 三六八…三七一

第十四章 地名

鳴石	三七七：三七九
瀧ノ前	三八〇
笹林	三八一：三八三
大平	三八四、三八五
瀧ノ入	三八六：三八九
道場屋敷	三九〇：三九七
鳴石山	三九八：四〇八
押上山	四〇九：四一〇
山畑毛	四一一：四一七
松峯	四一八：四二二
太田原	四二三：四二七
山葵沢	四二八：四三二
ウシロ山	四三三、四三四
背戸山	四三五：四四〇
寺山	四四一
細原向	四四二：四四六
瓜畑毛	四四七：四五〇
向山	四五一：四五七
	ワサビザワ

大橋尻	オオハシジリ	四五八：四六一
大日影	オオヒカゲ	四六二、四六三
大字「桑原」の部		
柿生土	カキウド	一：三八
上伊勢平	カミイセダイラ	三九：七五
下伊勢平	シモイセダイラ	七六：一二三
餅井坂	モチイザカ	一二四：一四二
扇形り	オオギナリ	一四三：一四七
尼ヶ沢	アマガサワ	一四八
追越	オツコシ	一四九：一六七
宮ノ後	ミヤノウシロ	一六八：一八〇
勝負埴	シヨウブガエリ	一八一：一九七
古栗林	コグリバヤシ	一九八：二二一
富石平	フセキダイラ	二二二：二三一
扇畑毛	オオギバタケ	二三二：二五三
柳谷戸	ヤナギヤト	二五四：二七四

奥之浦	オクノウラ	二七五…二八八
上野	ウエノ	二八九…三〇七
狐段山	コダンヤマ	三〇八…三一九
土肥ハズシ	トイハズシ	三二〇…三二一
御宝殿	ゴホウデン	三二二…三二三
竹生土	タケウド	三二四…三三〇
丸山	マルヤマ	三三一…三四七
大神	オオガミ	三四八…三九四
正光	シヨウコウ	三九五
滝ノ前	タキノマエ	三九六…四一七
下香音	シモカオト	四一八…四二五
上香音	カミカオト	四二八…四五五
馬坂	ウマザカ	四五七…四七七
小谷ヶ沢尻	コヤガサワシリ	四七九…四八八
上馬坂	カミウマサカ	
中峯	ナカミネ	四九二…四九三
ドウドウガ藪	ドウドウガヤブ	四九四…四九五
細野	ホソノ	四九六…四九七

田尻	タジリ	四九八、四九九
石菖洞	セキシヤウボラ	五〇〇…五〇七
上桜狩	カミサクラガリ	五〇八…五一〇
中桜狩	ナカサクラガリ	五一一…五一四
下桜狩	シモサクラガリ	五一五…五二〇
万年杉	マンネンスギ	五二一…五四〇
下伊山	シモイヤマ	五四一…五四六
神原	カンバラ	五四七…五五八
禰宜地洞	ネギヂボラ	五五九…五六一
太ノ田	ダイノタ	五六二…五八八
禰宜地	ネギヂ	五八九…六一三
風吹田	カゼフキダ	六一四…六六一
後山	ウシロヤマ	六六二…六七〇
神賀道	ジンガドウ	六七一…六八七
河原田	カワラダ	六八八…六九二
高崎	タカアゼ	大竹 拾五貫目に編入 六九三…七三〇
水汲戸	ミズクミド	七三一

第十四章 地名

矢崎	大竹 舟原に編入	上冷川	カミヒエカワ	一〇七五…一〇八六
井領免	ヤサキ 七三二	入穴	イリアナ	一〇八七…一一〇二
	イリヨウメン 七三三…七四三	礫石	ツブテイシ	一一〇三…一一二一
	上記二つは大竹に編入	御岳洞	ミタケガホラ	一一二二…一一五一
樋ノ谷戸	ヒノヤト 七四四…七六二	上入橋	カミイリバシ	一一五二…一一六三
金龍地	キンリュウチ 七六三…八〇五	崩ケ洞	クズレボラ	一一六四…一一六七
箕畑毛	ミノバタケ 八〇六…八三〇	下洞頭	シモホラガシラ	一一六八…一一八二
山畑毛	ヤマバタケ 八三一…八四五	上洞頭	カミホラガシラ	一一八三…一一九四
初才毛	ハツサイケ 六九三…七二二	伊山	イヤマ	一一九五…一二二〇
上原	カミハラ 八四六…八七六	大休場	オオヤスミバ	一二二一
長谷戸	ナガヤト 八七七…九一五	上江湖山	カミゴウザン	一二二二、一二二三
中原	ナカハラ 九一六…九四七	下江湖山	シモゴウザン	一二二四、一二二五
下原	シモバラ 九四八…九五八	向田	ムカイダ	一二二六…一二三〇
大久保	オオクボ 九五九…九九二	下田	シモタ	一二三一…一二三六
法師ヶ谷戸	ホシガヤト 九九三…一〇一一	上猪穴平	カミノアナダイラ	一二三七、一二三八
下冷川	シモヒエカワ 一〇一二…一〇二五	下入橋	シモイリハシ	一二三九…一二四二
中冷川	ナカヒエカワ 一〇二六…一〇七〇	猪穴平	イノアナダイラ	一二四三…一二四四
清水	シミズ 一〇七一…一〇七四	下黒岩	シモクロイワ	一二四五…一二四七

上黒岩	カミクロイワ	一二四八…一二五二
舟山	フナヤマ	一二五三…一二七四
猿平	サルダイラ	一二七五…一二七八
大洞	オオボラ	一二七九…一二八一
松峯	マツミネ	一二八二、一二八三
野呂	ノロ	一二八四、一二八五
上清水	カミシミズ	
大ヌタ場	オオヌタバ	一二九一
若草	ワカクサ	一二九二
黒岳	クロタケ	一二九三
石巻山	イシマキヤマ	一二九四
真ナシ	シンナシ	一二九五…一二九八
狐ヶ峯	キツネガミネ	一二九九
古草	フルクサ	一三〇〇
太右衛門石	タウエモンイシ	一三〇一
蛇石	ヘビイシ	一三〇二
棚上	タナウエ	一三〇三
柳沢	ヤナギサワ	一三〇四

乗埴	ノツカエシ	一三〇五
上男山	カミオヤマ	一三〇六
中男山	ナカオヤマ	一三〇七
三本松	サンボンマツ	一三〇八
苅藻川	カリモガワ	一三一〇
男立	オッタテ	一三〇九
下男山	シモオヤマ	一三一一
木サシ	キサシ	一三一二…一三二四
高雄山	タカオサン	一三二五
摩我野	マガノ	一三二六
音羽山	オトバザン	一三二七…一三二九
鶴ヶ盤石	ツルガバンジャク	一三三〇、一三三一
香音	カオト	一三三二、一三三三
庚申松	コウシンマツ	
城山	シロヤマ	一三二六、一三二七
中尾	ナカオ	一三二八…一三三〇
観音瀧	カンノンダキ	一三三一…一三三三
曲ヶ野	マガノ	一三三四

第十四章 地名

二ノ洞	ニノホラ	一三五…一三四〇
子豚野	コブタノ	一三四一、一三四二
大樹立	オオキダチ	一三四三…一三五三
笛場	フエバ	一三五四…一三五七
枯木	カレキ	一三五八
石割坂	イシワリザカ	一三五九
兜石	カブトイシ	一三六〇
茨ノ平	バラガタイラ	一三六一…一三六七
池尻	イケジリ	一三六八、一三六九
鑑ヶ峯	アブミガミネ	一三七〇…一三七二
鞍掛山	クラカケヤマ	一三七三
竹沢	タケノサワ	一三七四、一三七五
立原	タチハラ	一三七六、一三七七
長峯	ナガミネ	一三七八、一三七九
車沢	クルマザワ	一三八〇
北ノ詰	キタノツメ	一三八一
池ノ平	イケノタイラ	一三八二、一三八三
三ツ尾	ミツオ	一三八四

大字「大竹」の部

盗人厩	ヌストウマヤ	一三八五…一三八九
御番帰	ゴバンガエリ	一三九〇…一三九三
菖蒲沢	ショウブザワ	一三九四、一三九五
大芝原	オオシバハラ	一三九六、一三九七
国見岳	クニミタケ	一三九八…一四〇〇
中峯	ナカミネ	一四〇一…一四〇八
大上	オオカミ	一四〇九…一四一六
上	カミ	一四一七…一四二一
川向	カワムコウ	一四二二…一四二六
宮ノ前	ミヤノマエ	一四二七…一四四九
馬坂	ウマサカ	一四五〇…一四七六
坂下	サカシタ	一四七七…一四九三

拾五貫目 ジュウゴカンメ

一…一三、四六の一…四
六の四、四七の一、四七の
五、四七の六、六八八、六

八九の一、六八九の二、六

九〇の一、二、六九一、

六九二、一二の一、一二の

六：一二の九、一三の一、

Index

星谷戸

ホシヤト
一四：一六

柳谷戸

ヤナヤト 一七三一九、一七の四、

一九の二、一九の四、一九

の八：一九の一〇

池之平

イケノタイラ 二〇、二一

神谷戸

コウヤト 一三三：三九

庚申洞

コウジンボラ 四〇：四五、三八の二、

三八の三、三九の三、三九

の四、六五の一、八六の一、

二の

山伏木

ヤマブシギ 四六：六三

兜石

カブトイシ 六四・八九、四〇の四、

四〇の五、四〇の八、四二

一、三、四の二

六：四三の一九、四四の二、

四四の二、四四の五、四四

の六、四四の一〇、四四の

一四、四四の一六：四四の

二〇、四四の二三、四四の

二五、四四の二七：四四の

二九、四五の一、四五の三

…四五の六、六三の一、六

三の二、六三の四、一三八

一三九の一、一三九の二、

— 四〇 —
— 四 — の
— 三 —
— 四 —

の三

八重窪

ヤエクボ 九〇：一三三

船原

フナバラ
一三三：一五四
七三二

七三二：七四三

矢崎

ヤサキ
一五五：一六四

藤明

フジミヨウ 一六五：一六六

第十四章 地名

向原

ムカイハラ

一…八

大字「上沢」の部

法師谷戸

ホシガヤト

三二一…三二四

浜井場

ハマイバ

二九三…三二〇

下原

シモバラ

二八三…二九二

上原

カミバラ

二五六…二八二

樋谷戸

ヒノヤト

二五四…二五五

堀込

ホリゴミ

二四七…二五三

高畠

タカアゼ

二四三…二四六

井領免

イリヨウメン

…七三〇、七三四
二三二…二四二、七二三

六反田

ロクタンダ

二二四…二三一

神戸

ゴウド

二二四…二三三

冷川

ヒエカワ

一八六…二一八

下冷川

シモヒエカワ

一六七…一八五

上記は上沢の落合に編入

下人原

ゲニンバラ

七五五…七九四

藤明

フジミヨ

七一六…七五四

落合

オチアイ

六九八…七一五

森脇

モリワキ

六五五…六九七

反り畑

ソリバタ

五八五…六五四

宮辺

ミヤベ

五五六…五八四

竹倉越

タケクラゴエ

五三〇…五五五

三枚畑

サンマイバタ

四八二…五二九

亀ヶ入

カメガイリ

四四八…四八一

大洞

オオボラ

四一四…四四七

宮下

ミヤシタ

三五一…四一三

下向

シモムカイ

三一六…三五〇

向野

ムカイノ

二四五…三一五

山ヶ下

ヤマガシタ

一九六…二四四

養沢

ヨウタク

一七〇…一九五

井望田

イモウダ

一四〇…一六九

田中

タナカ

五三…一三九

寒取免

カンドリメン

九…五二

大字「間宮」の部

宮之前	ミヤノマエ	九〇…一一二
落合	オチアイ	八二…八九
茶屋町	チャアマチ	六四…八一
板倉	イタクラ	五一…六三
天神向	テンジンムコウ	三九…五〇
樋ノ内	デイノウチ	二八…三八
宮川	ミヤガワ	一…二七
石原	イシハラ	九五五…九六一
笹洞	ササホラ	九五…九五四
平所	ヒラシヨ	九〇九…九五〇
眞ヶ洞	タバコガホラ	八九四…九〇八
大芝原	オオシバハラ	八六六…八九三
亀ヶ洞	カメガホラ	八三五…八六五
穴口	アナグチ	八〇八…八三四
広谷内	コウヤウチ	七九五…

大窪	オオクボ	三八九…三九一
六反田	ロクタンダ	三八八
土佐窪	トサクボ	三八四…三八七
大長久保	ダイチョウクボ	三八三
下粟彦	シモアワヒコ	三六四…三八二
下五反田	シモゴタンダ	三五二…三六三
上五反田	カミゴタンダ	三四八…三五一
寺前台	テラマエダイ	三四一…三四七
寺前	テラマエ	三三一…三四〇
横田	ヨコタ	三二八…三三〇
上粟彦	カミアワヒコ	三二一…三二七
寺前窪	テラマエクボ	三一〇…三二〇
下田原	ゲデンバラ	二七六…三〇九
川向	カワムコウ	二〇六…二七五
仲町	ナカチヨウ	一八〇…二〇五
下町	シモチヨウ	一六二…一七九
市丸	イチマル	一三六…一六一
上町	カミチヨウ	一一三…一三五

第十四章 地名

狐田	キツネダ	三九二…四〇三
田中田	タナカダ	四〇四…四一七
瀬々ヶ坪	セセガツボ	四一八…四二七
赤狩	アカガリ	四二八…四三三
溝合	ミゾアイ	四三四…四四一
西前道越	ニシマエミチゴシ	四四二…四五〇
牛飼	ウシカイ	四五一…四五六
小塚田	コツカダ	四五七…四六五
鎌ヶ坪	カマガツボ	四六六…四七四
虫振	ムシブリ	四七五…四八六
西垂樋	ニシタタラビ	四八七…五〇八
西堀合	ニシホリアイ	五〇九…五三六
堀合	ホリアイ	五三七…五六〇
蓼有	タゼアリ	五六一…五七一
八反田	ハッタnda	五七二…五七三
茨之木	バラノキ	五七四…五八〇
天守	テンシュ	五八一…五八三
蛇ヶ橋	ジャガハシ	五八四…五八九

片瀬	カタセ	五九〇…六〇七
篠堀	シノボリ	六〇八…六一〇
下柚之木	シモユノキ	六一一…六一七
辻堀合	ツジホリアイ	六一八…六二九
中柚之木	ナカユノキ	六三〇…六三六
上柚之木	カミユノキ	六三七…六四二
成無	ナリナシ	六四三…六四九
東垂樋	ヒガシタタラビ	六五〇…六五五
向道越	ムコウミチゴシ	六五六…六六一
東前道越	ヒガシマエミチゴシ	六六二…六七〇
入用免	イリヨウメン	六七一…六七八
桑原田	クワハラダ	六七九…六九二
横狩又	ヨコカリマタ	六九三…七〇七
御新造	ゴシンゾウ	七〇八…七二一
尾成	オナシ	七二二…七三〇
伏ヶ坪	フシガツボ	七三一
道清	ドウセイ	七三二…七四一
観音免	カンノンメン	七四二…七四四

下正方	シモシヨウマン	七四五…七五四
上正方	カミシヨウマン	七五五…七五七
花ノ木	ハナノキ	七五八…七六六
杭打免	クイウチメン	七六七、七六八
本狩又	ホンカリマタ	七六九…七七六
縦狩又	タテカリマタ	七七七…七九〇
押付田	オシツケダ	七九一…七九九
四反田	ヨシタンダ	八〇〇、八〇一
夫田	ブデン	八〇二…八一四
古屋敷	フルヤシキ	八一五…八二二
七反田	ヒチタンダ	八二三…八三七
市丸向	イチマルムコウ	八三八…八五二
向田	ムカイダ	八五三…八六一
反り田	ソリダ	八六二…八六六
天池	アマイケ	八六七…八七六
穂瓜塚	ホオリツカ	八七七…八八二
丸田	マルダ	八八三…八八五

大字「塚本」の部

八ツ橋	ヤガハシ	一…一一
六反田	ロクタンダ	一二…二一
東穴田	ヒガシアナダ	二二…三二
四月田	ヨツキダ	四〇…四六
楽徳	ラクトク	四七…五〇
湯治免	トウジメン	五一…五八
堂免	ドウメン	五九…六四
笹ヶ坪	ササガツボ	六五…七四
壱町田	イツチヨウダ	七五…八三
京免	キョウメン	八五…九六
反里田	ソリダ	九七…一〇〇
神明	シンメイ	一〇一…一〇四
御門	ミカド	一〇五…一二六
株良	カブラ	一二七…一四一
扇田	オオギダ	一四二…一四六
水神松	スイジンマツ	一四七…一七二

第十四章 地名

大溝	オオミゾ	一七三…一八五
保亭	ボテイ	一八六…二〇五
山道	ヤマミチ	二〇六…二一六
沖田	オキダ	二一七…二二六
釜ヶ坪	カマガツボ	二二七…二三九
八反田	ハッタナダ	二四〇…二五一
上坪	ウワツボ	二五二…二六四
松ノ木田	マツノキダ	二六五…二七五
上島田	カミシマダ	二七六…二九〇
上本田	ジョウホンダ	二九一…二九九
下島田	シモシマダ	三〇〇…三〇八
北田	キタダ	三〇九…三一六
台北田	ダイキタダ	三一七…三二九
北村	キタムラ	三三〇…三九八
森山	モリヤマ	三九九…四六〇
若宮	ワカミヤ	四六一…四六五
高大縄	タカオオナ	四六六…四七五
中ヶ橋	ナカガハシ	四七六…四九九

神出	カミデ	五〇〇…五一〇
天王免	テンオオメン	五一一…五二二
宮の前	ミヤノマエ	五二三…五二六
下宮の前	シモミヤノマエ	五二七…五五五
久保田	クボタ	五六二…五七四
箱根田	ハコネダ	五七五…五九七
伊豆山田	イズヤマダ	五九八…六〇七
地持田	チモンダ	六〇八…六一三
沓形	クツガタ	六一四…六五五
鷹野橋	タカノハシ	六五六…六六六
塩辛畑	シヨツカラダ	六六七…六八三
小奴婦	コゾブ	六八四…七〇五
鶴巻田	ツルマキダ	七〇六…七一一
町田	マチダ	七一二…七二〇
宮地	ミヤヂ	七二一…七二八
王子	オオジ	七二九…七四四
馬場	ババ	七四五…七五八
堂島	ドウジマ	七六八…七九七

落合

オチアイ

八三六…八四七

新城

シンジョウ

八四八…八七五

木ノ下畑

キノシタバタ

八七六…八九一

西穴田

ニシアナダ

八九二…九〇一

大久保

オオクボ

九〇二…九二七

北大久保

キタオオクボ

九二八…九四七

西折上

ニシオリアゲ

九四八…九四九

元作り

モトヅクリ

九五四

七反田

ヒチタンダ

九五五…九六一

諸星

モロボシ

九六二…九七五

東松ノ木田

ヒガシマツノキダ

九七六…九八三

右の四字は仁田へ飛地

大字「肥田」の部

東居沼

ヒガシイヌマ

一…一七

二一

二四…二七

西居沼

ニシイヌマ

三四…七一

新宿

シンシユク

八四…九六

二九

九八…一〇三

一〇五…一〇八

一一〇…一一三

一一五…一一八

一二〇…一二六

一三七…一三九

一四一…一四二

一七二…一七六

一七八…一七九

一八一…一八二

一八四…一九二

一四九

一五六…一五八

一六一

一六四…一六九

宿後

シユクゴ

第十四章 地名

鈴川	スズカワ	一九三：一九九
		二〇一、二〇二
		二〇六、二二二
		二一六：二一八
松村	マツムラ	二三〇：二三八
		二四〇、二四一
神無森	カミナシモリ	二六四：二八一
輪ノ内	ワノウチ	二八二：二九六
大川久保	オオカワクボ	二九七：三四一
蛇ヶ橋	ジャガハシ	三四二：三七三
		三七六、三八〇
		三九二：三九五
奥柳原	オクヤナギハラ	四〇五、四〇八
		四〇九、四一一
		四二二
		四一四：四二四
		四二七
柳原	ヤナギハラ	四二八：四五七
南中道	ミナミナカミチ	四五八：五〇八
北中道	キタナカミチ	五〇九：五六一
池ノ端	イケノハタ	五六二：六四
堀込	ホリゴメ	六四九：六七〇
		六七四：六八八
北屋敷	キタヤシキ	六八九：七二七
南屋敷	ミナミヤシキ	七二八：七七五
田畑毛	タバタケ	七七六：八二〇
御屋敷	オヤシキ	八二一：八四九
芝折川戸	シオリカワト	八五〇：八六九
北之下	キタノシタ	八七〇：九一一
下屋敷	シモヤシキ	九一二：九四四
坊之下	ボウノシタ	九四五：九六八
宮下	ミヤシタ	九六九：九九三
神楽	カンラク	九九四：一〇一六
霜月免	シモツキメン	一〇一七：一〇三八
田中久保	タナカクボ	一〇三九：一〇八六
落合	オチアイ	一〇八七：一一一四

仲川原 ナカガワラ 一一一五：一一四三

西之久保 ニシノクボ 一一四四：一一九三

日守前 ヒモリマエ 一一九四：一二四八

松村久保 マツムラクボ 一二四九

上記は仁田の道玄に合併

大字「日守」の部

正戸境 マサドサカイ 一：四九

柳添 ヤナギゾエ 五〇：五四

谷戸 ヤト 五五：六八

姥洞 ウバガボラ 六九：七八

柳添 七九：九六

榎畑 エノキバタ 九七：一一七

寺前 テラマエ 一一八：一三一

堀合 ホリアイ 一三二：一五一

松下 マツシタ 一五二：一六三

熊野前 クマノマエ 一六四：一七七

下山 シモヤマ 一七八

花ノ木 ハナノキ 一七九：一九九

男坂 オサカ 二〇〇：二一三

杉木平 スギノキタイラ 二一四：二三七

五反窪 ゴタンクボ 四五二：四七二

大峯 オオミネ 五三三：五三五

入山 イリヤマ 五五〇：五五九

松下 シミズ 三二〇：三四四

清水 ヤマガシタ 三四五：三五七

山ケ下 ツカハタ 三八二：四〇八

塚畑 イズミヤシキ 四〇九：四四一

泉屋敷 ブタイ 四四二：四五一

舞台 ナカザト 四七三：四九四

中里 カミハラ 四九五：五三一

神原 メサカ 五三六：五四九

女坂 ネギシ 五六〇：六〇一

根岸 サカシタ 六〇二：六五九

坂下

第十四章 地名

新坂	ニイザカ	六六〇…七四三
岩崎	イワサキ	七四四…七九四
宮下	ミヤシタ	七九五…八八三
札幌	フダバ	八八四…九一〇
椿畑	カンゾウバタ	九一…九七七
丑之起	ウシノキ	九七八…一〇一一
大川原	オオガワラ	一〇一二…一〇六三
沢畑	サワハタ	一〇六四…一二二四
源内窪	ゲンナイクボ	一二二五…一二〇〇
岡ノ台	オカノダイ	一二〇一…一二四九
土手ノ内	ドテノウチ	一二五〇…一二六五
下り	クダリ	一二六六…一二九四
芝原	シバハラ	一二九五…一三二三
古川	フルカワ	一三二四…一三四八
内土井	ウチドイ	一三四九…一三六六
川原崎	カワラザキ	一三六七…一四〇五
宮下窪	ミヤシタクボ	一四〇六
五反窪	ゴタンクボ	四五二…四七二

大字「新田」の部

東居沼

ヒガシイヌマ

一三、一四

一六、二四

二六、三三

七五、九六

新宿

シンシュク

九八…一〇三

一〇五…一〇八

一一〇…一一三

一一五…一一八

一二〇…一三六

一四四、一四六

一四七、一五〇

一五二…一五五

一五九、一六〇

宿後

シュクゴ

(注) 小字名と地番は農地の基盤整備や河川の改修、地籍調査などによって無くなったり合併したりして変動が大きい。

第十五章 函南町の将来

(一) 総合計画の策定

函南町の人口

町の人口は、昭和四十年頃まで、一万五千人程度で推移してきた。しかし、昭和四十五年頃から、熱海・三島のベッドタウン化により、人口は急増した。その主な理由として、いろいろ指摘できるが、やはりその第一は、熱海・三島方面の商業、工業地帯への通勤に便利な点、宅地が比較的安く、しかも容易に求められる点にあった。

したがって、函南町の人口は、当然今後、三万五千人を越すことは必定であり、町の将来も、こうした人口増を踏まえて、二一世紀を展望した総合計画、基本構想が策定されなければならない



町 庁 舎

町づくりの指標が明示された。

「教育文化の充実した町」「豊かで、住みよい、福祉の充実した町」「治山、治水の整備された災害の少ない、緑と太陽に恵まれた環境のよい町」「上・下水道の完備した保健衛生の充実した町」等々を基本としたものであった。

特に当町の規模、形態、性格、特徴、自然環境を重視し、「土地利用の有効」と「経済効果の上がる、しかも財政力豊かな町」づくりを骨子に据えた基本計画であった。



丹那放牧場

なった。

総合計画・基本構想 町は人口急増に伴い、学校、幼稚園等の教育行政を重点的に推進してきたが、今後、町行政として全般にわたる公平

な行政執行が図られなければならない。そこで、人口増加による行政の偏重、財政圧迫への対処として、昭和四十五年、函南町としての総合計画・基本構想を策定した。

すなわち、「明るく、豊かで、住みよい町づくり」を目的とした基本構想であった。しかし、この総合計画も、急増する人口増と、時代の変化により改定せざるを得なくなり、ついに、昭和五十四年三月、改定に踏みきった。

この改定の内容は、基本的には大差はなかったが、より具体的に明確に、

(二) 今後の課題

基本計画 函南町の将来は、やはりこうした総合基本計画を完全実施することによって、より発展することになる。行政の面に即していえば、一時期のように、場当たり的な行政執行ではなく、予算の裏付け

がある確実な基本計画の実践が要望される。そのためには、財政力を伴った計画の一〇〇パーセント消化が必要であろうし、その財政力を豊かにすることが考慮されなければならない。その財政力を豊かにするために、基本計画に沿って述べれば、

1、工業立地の行政を推進し、工業団地の建設を図り、公害のない企業誘致等を行なつて、雇用促進を図り労働力を高め、町に活力を与え、法人税等の増収を図ること。

2、卸売団地の建設により、商業活動を充実させ、商業を活発に収益の増大を図ること。

3、国や県の補助金の獲得を増やし、河川や道路の整備を図り、風水害の災害から町を守り、安心して生活できる町づくりをすること。

ということができるといふことができる。

以上、三点を完全実施することにより、財政力は大きく伸展し、更に行政全般を、公平に執行することにより、町総合計画の基本方針は活かされ、その活性化も図られよう。昭和六十年、町は今後十年間の町づくりを目標とした基本的な施策決定のために「第三次総合計画」策定に取りかかった。

町民憲章

町制施行二十周年を記念して、昭和五十八年十二月十五日、町民憲章が告示された。

まず、町民憲章制定委員会が発足し、昭和五十八年十月八日(土)、第一回制定委員会を開催。制定要

領、募集要領を中心に応募締切りを十一月十五日と決めた。

その結果、七二点の応募があり、第二回委員会において、優秀作品十三点を選び、慎重審議検討し、第三回委員会において、最優秀作品をもとに、「町民憲章」草案を作成した。

制定の趣旨

「函南町民であることに誇りを持ち、町民ひとりひとりが、自覚と責任を持って、町をさらに『明るく、住みよく、豊かに』するために、町民が、自主的に守るべき規範として、また自治の指針として活用するために『函南町民憲章』を制定する。」

十一月二十四日、草案決定、議会報告を経て昭和五十八年十二月十五日制定された。

町民憲章制定委員（◎印は草案委員兼任）

◎委員長 後藤 弘（議長）

委員 八木 雅三（総務委員長）

◎ 土屋 弘光（沼工教諭）

柿島 直人（農業）

杉崎はつる（婦人会長）

桜井 和子（前婦人会長）

中村 博夫（町長）

委員 秋津 三郎（商工会長、社教委員長）

◎ 佐藤 俊彦（日大助教授）

◎ 高橋 義治（原東小教諭）

西原 三郎（区長会長）

渡辺 忠義（文化協会会長）

◎ 鈴木 孝司（教育長）

以上の経過を経て、昭和五十九年三月二十四日（町施行二十周年記念式典の日）、勤労者保健体育センター横に建立された「町民憲章」碑の除幕式が挙行された。更に、公施設等に、「町民憲章」が告示された。

町民憲章

わたくしたちは、箱根の南、秀麗富士に見守られる緑ゆたかな函南町の町民です。

町民としての誇りと自覚をもち、この憲章を定めます。

一、自然を愛し、より美しいまちをつくります。

一、文化の向上につとめ、心ゆたかなまちをつくります。

一、人とのふれあいを大切にし、思いやりのあるまちを

つくります。

一、心身を鍛え、健康で明るいまちをつくります。

一、創意と工夫で、活力のあるまちをつくります。



町民憲章碑除幕式

こよなく函南を愛し、函南に生きる喜びを求める町民によつて、この町民憲章は規範として生かされ、町民は、総合基本計画のもと、「豊かで、住みよい、明るい町づくり」の発展に更に寄与することであろう。

また、そうした町民が多ければ多いほど、函南町の発展は明白であり、それだけに、町民ひとりひとりの自覚と責任が望まれる。

二一世紀への展望のもと、新たに、力強く、函南町は発展しつつある。



町制施行20周年を祝って

(付)

近代史年表

年号	月日	町の歴史	国・県の主な出来事
慶応四 明治元 一八六八	六・二八	韭山県に所屬する	五箇条の御誓文を發布(三・一四) 江戸を東京と改称(七・一七) 明治と改元(九・八)
明治四 一八七一	一一・一四	韭山県が足柄県に編入される	東京・京都・大阪間に郵便開始(一一・二四) 廃藩置県(七・一四) 岩倉具視らを欧米に派遣(一一・二〇)
明治六 一八七三	六・二〇	函南学校、桑村学校、盛山学校、丹那学校創立	徴兵令發布(一一・一〇) 征韓論敗れ、西郷隆盛・板垣退助ら下野(一〇・二四)
明治九 一八七六	四・一八 七・五	足柄県から静岡県に編入される 静岡県第八大区七小区戸長役場を函南学校内に開設 箱根山字尾山二八ヶ町村入会株場民有地編入許可される(現在の御山組合)	府県の統合が行われる(四・一八) 静岡県、浜松県が合併して静岡県成立(八・二四)
明治一三 一八八〇	三・五	学区制度の改正により、函南尋常小学校、第一支校丹那学校、第二支校桑村学校創立	太政官制を廃し、内閣制度確立(一一・二四)
明治一八 一八八五		市町村制施行により函南村となる。人口六、一〇〇人、戸数一、二〇〇戸、大字一六……仁田・大土肥・柏谷・畑毛・平井・丹那・畑・軽井沢・田代・桑原・大竹・上沢・間宮・塚本・肥田・日守	大日本帝国憲法發布(二・一一) 東海道線、新橋・神戸間全通。所要時間約二〇時間(七・一)
明治二二 一八八九	四・一	殖産林禁伐林組合結成	府県制・郡制公布。地方自治制度の確立(五・一七) 教育勅語發布(一〇・三〇) 第一回帝国議会召集(一一・二五)
明治二三 一八九〇	三・三一 五・	函南村役場建設(現在位置)	郡の廃合行われ、君沢・田方・賀茂の一部をもって田方郡とする(四・) 下関条約調印(四・一七) 三国干涉(四・二八) 新橋・神戸間に急行列車を運転。所要時間一七時間
明治二八 一八九五		函南村農会組織される。会長・仁田大八郎	

明治二九 一八九六		仁田信用組合認可される	二二分(九・一)
明治三一 一八九八	五・二〇	豆相鉄道(現伊豆箱根鉄道駿豆本線)三島(現下土狩駅)―南条(現伊豆長岡駅)間開通	公立学校に学校医を置く(一・一二) 日本で始めて映画が製作される
明治三五 一九〇二	四・一六	郡立田方農林学校開校	日英同盟協約調印(一・三〇)
明治四三 一九一〇	九・二五	三島警察署函南村仁田警察官駐在所開所(昭五五・四・一警察官派出所となる)	韓国併合条約調印(八・二三) 白瀬中尉が南極探險隊出発(一一・二九)
明治四四 一九一一	一一・	新田区肥田より独立し、一七大字となる	
明治四五 大正元 一九一二	四・	函南村人口八、九〇〇人、戸数一、二〇〇戸 役場吏員数 村長 助役 収入役 書記六人 雇三人 給仕一人 計一三人 函南村誌発行	第五回オリンピック、ストックホルムで開催 日本初参加―三島弥彦、金栗四三(七・六) 明治天皇崩御、大正と改元(七・三〇) 乃木大将夫妻殉死(九・一三)
大正三 一九一四	二・二七	三島警察署函南村間宮警察官駐在所開所(昭和五五・四・一警察官連絡所となる)	第一次世界大戦始まる(七・二八) 対独宣戦布告、大戦に参加(八・二三) 東京駅開業(一一・一八)
大正四 一九一五		三島警察署函南村軽井沢警察官駐在所開所	第一回全国中等学校優勝野球大会開催(八・一八) 大正天皇即位式(一一・一〇)
大正五 一九一六	一二・一六	大場局電信電話事務開始	大隈重信首相狙撃される(一一・二二)
大正七 一九一八	四・一	丹那トンネル工事着工(東口大正七・四・一、西口大正七・七・五)	シベリア出兵を宣言(八・二二) 第一次世界大戦終る(一一・一一) 富山県に米騒動おこり全国に波及する
大正九 一九二〇	一〇・一	丹那トンネル工事に伴う火力発電所を冷川に建設 第一回国勢調査 人口九、六一〇人、一、六八七戸	国際連盟発足(一・一〇) 国際連盟に正式に加盟(七・)

大正一〇 一九二一	一〇・二七	三島大社前、榎井沢間、富士屋バス開業	第一回国勢調査（二〇・二） 総人口 七、六九八万八、三七九人
大正一二 一九二三	四・一	丹那トンネルで崩壊事故（熱海口）	郡制を廃止（四・一二） 原敬首相東京駅で暗殺される（一一・四） ワシントン会議で日・英・米・仏の四国条約調印（二・一三）
大正一三 一九二四	九・一	関東大震災 震度七 （村内被害 死者一 負傷六 住宅全半壊一六〇） 丹那トンネル西口一、〇九四メートルで大崩壊事故、 一六人死亡 大湧水発生 丹那トンネル工事に伴う湧水問題起きる（昭和七年まで）	メイトル法実施（七・一） 駿豆鉄道、修善寺まで延長
大正一四 一九二五	二・一〇	国勢調査 人口九、七二四人、戸数一、七三八戸	東京放送局、ラジオ放送開始（三・二二） 普通選挙法公布（五・五） 郡役所廃止（七・一）
大正一五 昭和元 一九二六	一〇・一		大正天皇崩御、昭和と改元（一二・二五）
昭和三 一九二八	一二・九	役場庁舎新築（現在位置）	第一六回衆議院議員選挙。最初の普選（二・二〇） 張作霖爆死事件（六・四） ドイツ飛行船ツェッペリン号訪日（八・一九）
昭和四 一九二九	三・	平井水道組合給水開始	ロンドン海軍軍縮条約調印（四・二三） 東京・神戸間に超特急「燕」運転。所要時間八時間五五分（一〇・一） 浜口雄幸首相狙撃される（一一・一四）
昭和五 一九三〇	四・ 一〇・一 一一・二六	大竹水道組合給水開始 国勢調査 人口一〇、三三八人、一、四七二戸 北伊豆地震（午前四時二分 M七・三） （村内損害 死者三六、重軽傷者二八五、住家全半壊焼失一、五二七）	
昭和七 一九三二			上海事変勃発（一・二八） 犬養毅首相暗殺される（五・一五）

昭和八 一九三三	六・一九	丹那トンネル貫通	日本、國際連盟を脱退(三・二七)
昭和九 一九三四	四・四・七・二三 一一・一一・三〇	丹那、畑水道組合給水開始 上沢水道組合給水開始 東京電灯(株) 平井発電所閉鎖 水騒擾事件(丹那トンネル漏水問題の騒動) 畑毛水道組合給水開始 丹那トンネル工事完成(延長七、八〇四メートル、 工費二、六〇〇万円、工期一六年) 函南駅開業	室戸台風。死者行方不明者三、〇三六人 全壊流失家屋四万戸(九・二二) ワシントン条約破棄を通告(二・二九)
昭和一〇 一九三五	一〇・一一・一一	国勢調査 人口一〇、〇四三人、一、六二八戸 三島警察署函南村大竹警察官駐在所開所	第一回芥川賞発表。受賞石川達三「蒼氓」(四・)
昭和一一 一九三六	九・一	函南郵便局開局	二・二六事件(二・二六)
昭和一二 一九三七	一〇・一	国勢調査 人口一〇、六二五人、一、六四八戸	日独防共協定調印(二・二五)
昭和一三 一九三八	一〇・一	義務教育六・三制施行。函南、丹那、桑原小学校と 函南中学校(授業は函南小学校にて)開校 国勢調査 人口一四、七八四人、二、五三四戸	日独伊三国同盟成立(九・二七)
昭和一四 一九三九	一〇・一	平井原に函南中学校建設 アイオン台風(村の損害 死者一、全壊家屋五、流 失家屋九、埋没家屋三、流失橋梁一九) 函南中学校、平井原より八ッ溝に移転(中学移転に より分村問題起きる)	国民服を制定(一一・二二)
昭和一五 一九四〇	一〇・一	国勢調査 人口一四、九五三人、二、五五〇戸	マッカーサー、二・一ゼネストに対し中止命令(二・三三)
昭和一六 一九四一	一〇・一	桑村小学校東棟校舎落成	教育基本法、学校教育法公布(三・三三) 知事、市町村長選挙。初めての首長公選(四・五)
昭和一七 一九四二	一〇・一	国勢調査 人口一四、九五三人、二、五五〇戸	新制高等学校発足(四・一)
昭和一八 一九四三	一〇・一	国勢調査 人口一四、九五三人、二、五五〇戸	教育委員会法公布(七・一五)
昭和一九 一九四四	一〇・一	国勢調査 人口一四、九五三人、二、五五〇戸	国民の祝日を制定(七・二〇)
昭和二〇 一九四五	一〇・一	国勢調査 人口一四、九五三人、二、五五〇戸	法隆寺金堂炎上(一・二六)
昭和二一 一九四六	一〇・一	国勢調査 人口一四、九五三人、二、五五〇戸	湯川秀樹、ノーベル物理学賞受賞(一一・三三)
昭和二二 一九四七	一〇・一	国勢調査 人口一四、九五三人、二、五五〇戸	朝鮮戦争勃発(六・二五)
昭和二三 一九四八	一〇・一	国勢調査 人口一四、九五三人、二、五五〇戸	金閣寺焼失(七・二二)
昭和二四 一九四九	一〇・一	国勢調査 人口一四、九五三人、二、五五〇戸	児童憲章制定(五・五)
昭和二五 一九五〇	一〇・一	国勢調査 人口一四、九五三人、二、五五〇戸	
昭和二六 一九五一	一〇・一	国勢調査 人口一四、九五三人、二、五五〇戸	

昭和三五	一〇・一	国勢調査 人口二五、五〇五人、三、〇一七戸	新安保条約批准交換、発効(六・二三)
昭和三四 一九五九	四・	村営日守簡易水道給水開始 村会議員定数を二六名から二〇名に変更	メートル法施行(一・二) 伊勢湾台風、死者五、〇四一人、被害家屋五七万戸 (九・二六)
昭和二三 一九五八	二・二六 九・二六	水道特別会計設置 狩野川台風(村内損害 死者二、重軽傷者五三、全 潰家屋八、流失家屋二、半潰家屋九三、床上浸水四 五三)	関門トンネル開通(三・九) 学校保健法公布(四・一〇) 東京タワー完成(二・二三)
昭和三三 一九五七	四・一九	村営塚本簡易水道給水開始 村営上水道使用条例公布 村立公民館完成	南極観測隊、南極オングル島上陸に成功。昭和基地 と命名(一・三〇) 茨城県東海村原子力研究所に原子炉完成(八・二七)
昭和三一 一九五六		十国峠ケーブルカー展望台完成	新教育委員会法公布(一〇・二) 国連総会、日本の加盟を全員一致で可決(二・一 八)
昭和三〇 一九五五	一〇・一	新農村建設事業による東部畜産農協牛乳加工処理工 場完成 国勢調査 人口一五、〇三六人、二、六一四戸	佐久間ダム完成(二・六)
昭和二九 一九五四	四・	春光保育園(仁田ほか四大字)設立	ビキニ水爆実験。第五福留丸「死の灰」事件(三・二) 防衛庁、自衛隊発足(七・一) 洞爺丸遭難事故。死者行方不明二、一五五人(九・ 二六)
昭和二八 一九五三	一・一一 四・一 二・二三 三・	仁田区に火災(全焼二六戸、半焼五戸) 丹那中学校開校 上沢区に火災(全焼六戸、半焼二戸) 若葉保育園開園(函南村、中郷村合同)	NHK、テレビ放送開始(二・二) 民間テレビ放送開始(八・二八) 奄美群島、日本へ復帰(二・二五)
昭和二七 一九五二	四・四	全国緑化大会により箱根山緑化推進(天皇・皇后両 陛下ご植林)	日米安全保障条約調印(九・八)

昭和四一	一・一	丹那地区湯水補償協定成立(新丹那トンネル)	建国記念の日を二月一日と定める(二・一八)
昭和四〇 一九六五	一・五 一・一九 七・二八 八・	第一回美術展 丹那地区、農村集団自動電話に切り換え 狩野川放水路竣工 静岡県東部農業改良普及所田方支所開所 〃 東部家畜保健衛生所開所 〃 東部園芸試験実証圃開所 国勢調査 人口一五、三二五、三、三七五戸	ILO八七号条約承認、国内関係法成立(五・二七) 朝永振一郎、ノーベル物理学賞受賞決定(二〇・二一)
昭和三九 一九六四	一〇・六 一〇・一〇 一一・一 一一・五	舟山飲料水供給施設給水開始 オリンピック聖火函南町を通過 静岡県畜産共進会開催(丹那中学校) 函南町消防団組織改められる(一六分団から五分団に) 第一次農業構造改善事業(丹那地区) 始まる	日本、OECDに加盟(四・二八) 名神高速道路全通(九・五) 東海道新幹線開通(二〇・二) オリンピック東京大会開催(二〇・一〇)
昭和三八 一九六三	四・一 四・二 七・二一 一一・一 一一・三	町制施行、函南町となる(人口一五、二三八人、二、九一四世帯) 春光保育園を春光幼稚園とする 第一浄水場通水開始 鞍掛ゴルフ場オープン 二葉保育園、丹那保育園が幼稚園となる 函南小学校プール完成	初の日米間テレビ宇宙中継受信に成功。ケネディ大統領暗殺のニュースを受信(一一・二三)
昭和三七 一九六二	二・一九	伊豆スカイライン完成(熱海峠〜亀石峠二一キロ) 三本松飲料水供給施設給水開始 桑村小学校講堂兼体育館落成	北陸トンネル完成。日本最長(三・二〇)
昭和三六 一九六一	六・二八	村立二葉保育園、春光保育園、自由ヶ丘保育園、富士見台保育園、みのり保育園開設 集中豪雨(村内被害 床上浸水二七戸、道路四ヶ所、河川四ヶ所、橋梁一ヶ所)	浅沼稻次郎社会党委員長刺殺される(二〇・二二) 天城トンネル開通
昭和三四 一九六〇	四・		

一九六六	一・一〇 二・二六 三・二七 四・一 一〇・一	函南農協本所（仁田）落成 婦人青少年会館落成 町長選挙（初めて記号式投票採用） 町営畑・丹那地区簡易水道給水開始 ゴミ回収事業始まる 鞍掛山ロープウェイ完成 丹那中学校、桑村小学校にプール完成	
昭和四二 一九六七	四・ 一・二四	町営田代・軽井沢簡易水道給水開始 富士箱根ランド（中小企業センター）落成	
昭和四三 一九六八	一・九 四・一三 六・三〇 一〇・二一	二葉幼稚園園舎完成 函南局電話自動ダイヤル化される 広報お知らせ版、第一回発行 函南小学校校舎落成（RC三F 三、九六二平方メートル） 函南中学校火災、七・一七平方メートル焼失 細沢飲料水供給施設給水開始	
昭和四四 一九六九	四・一 四・二五 五・三一 六・一八 一一・二 一二・二五	田方郡交通火災共済組合発足 新幹線三島駅開業 自由ヶ丘保育園園舎完成 町章制定 第一回文化祭 六本松飲料水供給施設給水開始	東名高速道路全線開通（五・二六） 沖繩返還交渉成立（一一・二一）
昭和四五 一九七〇	三・三一 六・二三 六・一五 七・一 一〇・一 一一・二三	町営住宅冷川団地一〇戸完成 第一回小学校陸上記録会開催 集中豪雨 農業振興地域の整備に関する法律に基づく農業地利 用計画告示 国勢調査 人口一七、七三八人、四、二〇七戸 函南町総合開発計画策定	日本万国博覧会開催（三・一四） 国勢調査で日本の人口一億を突破（二〇・一） 三島由紀夫、市ヶ谷の陸上自衛隊で割腹自殺（一一・二五）

昭和四六 一九七一	二・一六 三・三一 〃 四・一 四・一 四・一 四・一 四・一三 六・一一 九・八 一〇・一 一〇・一 一一・一 一二・二四	三町（函南・葦山・伊豆長岡）共同し尿処理場を塚本地区に計画 第二次農業構造改善事業始まる 新山飲料水供給施設給水開始 町営住宅冷川団地一五戸完成 東部畜産農協ミルクプラント完成 田方地区消防組合設立 丹那中学校を函南中学校に統合 間宮幼稚園開園 パレスゴルフクラブ富士コースオープン 地籍調査事業（一〇ヶ年計画）始まる 間宮幼稚園園舎落成 熱函トンネル貫通 町全域都市計画区域に決定（六、六二四ヘクタール） 南箱根ダイヤランド別荘分譲開始 役場庁舎起工式 丹那水道を町営丹那地区簡易水道に引き継ぐ	沖繩返還協定（六・一七）
昭和四七 一九七二	三・二二 三・三一 四・一 七・二〇 一〇・五	函南中学校丹那教場（旧丹那中学校）廃校 富士見台保育園廃止 田方地区常設消防署函南支署開署 田方情報センター開設 函南中学校校舎落成（RCF 六、〇一七平方メートル） 役場庁舎落成 伊豆仁田駅前郵便局開局 町営東部簡易水道給水開始	軽井沢浅間山荘で連合赤軍の五名逮捕される（二・二八） 奈良県明日香村の高塚古墳発掘（三・二二） 川端康成が自殺（四・一六） 沖繩返還（六・一五）
昭和四八 一九七三	三・三 三・九 三・二六 三・二九	みのり保育園園舎落成 函南中学校体育館完成 商工会館落成 熱函道路開通	韓国大統領候補金大中氏、東京より韓国に拉致される（八・八） 第一次石油危機はじまる。オイルショック（一〇・二三）

昭和四九 一九七四	三・三〇 四・一 〃	町営住宅冷川団地二〇戸完成 町制施行一〇周年記念式 町の花―箱根桜 町の木―ひめしやら制定 みのり保育園を幼稚園とする 箱根山林道完成(延長八、四二二メートル、着工三 六年)	伊豆半島南部に大地震。M六・八、震度五、死者三 〇人、家屋・道路の被害甚大(五・九)
昭和五〇 一九七五	二・一 二・四 三・二五 三・二六 五・一 八・二八 一〇・一 一一・三	桑原日向周辺地区簡易水道給水開始 春光幼稚園北園舎落成 町営住宅塚本団地一〇戸完成 県営駿豆水道受水開始 印鑑条例施行 大都パサディナタウン上沢区簡易水道認可 国勢調査 人口二三、一一六人、五、九七五戸 (三〇%増で県下二位の伸び) 第一回商工祭	新幹線岡山―博多間開業。東京―博多間全通 (三・一〇) 英国のエリザベス女王夫妻来日(五・七) 中央自動車道恵那山トンネル開通。八、四八九メー トル、日本最長の自動車トンネル(八・二三) 天皇・皇后初の訪米(九・三〇)
昭和五一 一九七六	一・二〇 二・二〇 三・一 三・七 四・一 四・五 四・八 一〇・二 一〇・四	老人いこいの家完成 柏谷横穴群、国指定文化財となる パレスゴルフクラブ箱根コースオープン 青年団三〇周年記念祭 田方広域公共下水道建設事業開始 東小学校開校 ごみ焼却場竣工 東小学校校舎落成 函南郵便局開局(移転)	京都平安神宮の本殿・内拝殿など全焼(二・六) 日本で初の五つ子誕生(一・三一) ロッキード事件議会で追及開始(二・六) 第二一回オリンピック、モントリオールで開催。日 本選手二六八人参加(七・一七)

昭和五二 一九七七	一〇・一二 一〇・一五 一〇・一八 一〇・二九	都市計画区域の市街化・市街化調整区域の区分決定 (市街化区域三七〇ヘクタール) 町宮住宅仁田団地一〇戸完成 月光天文台開所 春光幼稚園南園舎落成	一回マラソン大会 上沢団地簡易水道給水開始 桜の名勝づくり(函南駅周辺) 統計書「かんなみ」発行 函南駅前郵便局開局 東小学校プール完成 沼津夜間救急医療センター開所	昭和五三 一九七八	一・一四 三・三 三・三〇 四・一 四・一六 八・一 八・一四 一〇・八 二・四 二・二五	伊豆大島近海地震発生 丹那幼稚園園舎落成 丹那小学校校舎・体育館落成 西部保育園園舎落成 西部保育園開園 歩こう会始まる 畑毛簡易郵便局開局 第二浄水場通水開始 町制一五周年記念。第一回町民体力づくりレクリエーション大会 くろたけ号巡回図書館始まる 二葉幼稚園園舎落成	伊豆大島近海地震(M七)。伊豆半島被害甚大。 死者二五人(一・一四) 宮城県沖地震(M七・五)。死者二七人、損壊家屋二、八四四戸(六・一二)	昭和五四 一九七九	一・一二 一・三一 二・一九 三・五 三・一三 三・三〇	特野川流域下水道東部浄化センター着工 町宮住宅上沢団地一〇戸完成 東小学校体育館落成 函南農協本所新築移転 函南町総合計画、基本構想議決 保健センター竣工	上越新幹線の大清水トンネル貫通。世界最長の山岳トンネル、二万二、二八メートル(一・二五) 電話のダイヤル即時通話完成(三・一四) 警察庁、車の運転免許所有者四〇〇〇万人突破と発表(六・一八) 東名高速道路焼津市日本坂トンネル内で車五台玉突
--------------	----------------------------------	--	---	--------------	--	--	--	--------------	---	--	--

昭和五五 一九八〇	四・一 八・四 一〇・二九 一一・二六	西小学校開校 全国婦人バレーボール大会で函南クラブ全国優勝 西小学校校舎落成 肥田簡易グラウンド開設（狩野川河川敷）	き衝突、炎上。死者七人、一七三台延焼（七・一一） 木曾御岳、有史以来初めて噴火（二〇・二八）
昭和五八 一九八三	一・一 三・二七 三・二八 四・一 六・二八 七・一四 一〇・一	三四行政区となる 同報無線完成（送信施設一、受信施設五二） 函南小学校体育館落成 民営ひまわり保育園開園 西小学校プール完成 水道課・下水道課分室へ移転 国勢調査 人口二八、七四九人、七、七六九戸	第二回オリンピック・モスクワ大会開会。日・米・西独・中国など不参加（七・一九） 国鉄静岡駅前地下街でガス漏れ爆発。地上・地下で死者一四人、重軽傷約二〇〇人（八・一六）
昭和五七 一九八二	三・一六 四・一 八・一九 九・七 一〇・四 一一・一〇 一二・二〇	西小学校体育館落成 民営函南さくら保育園開園 桑村小学校新校舎起工式 東中学校校舎起工式 函南中学校県中学総体において男女総合優勝 一二月一六日県教育長杯受賞 函南小学校 東小学校増築工事着工 忠魂碑を函南小学校校庭より役場前へ移転	厚生省の招待で、中国残留孤児四七人初の正式来日 二六人身元判明（三・二二） 臨時行政調査会、第二次臨調発足（三・一六） IOC総会、八八年オリンピック開催地を韓国ソウルと決定（九・三〇） 福井謙一、ノーベル化学賞受賞（二〇・一九）
昭和五七 一九八二	三・七 四・一 七・八 七・一三 一一・六	桑村小学校校舎一部完成（移転） 東中学校開校 桑村小学校プール完成 東中学校体育館落成 桑村小学校落成式	日航旅客機、羽田空港前の海面に墜落、二四人死亡（二・九） 東北新幹線、大宮―盛岡間開業（六・二三） 上越新幹線、大宮―新潟間開業（一一・一五）
昭和五八 一九八三	八・一 四・一 八・三一 一二・二〇 一二・一五	函南中学校プール完成 関宮児童公園開園 函南小学校耐震工事、大規模補修工事完了 関宮幼稚園園舎落成 町民憲章制定	日本初の実用通信衛星、さくら二号a打ち上げ（二・四） 神奈川県警、横浜市内の公園・地下街などで無抵抗の浮浪者を襲った中学生一〇名。逮捕（二・一二）

あとがき

『函南町誌』『上巻』が発刊されたのは、昭和四十八年三月。以後、中断されていたので、町制二十周年記念を迎えた昭和五十八年三月、記念行事の一環として、『函南町誌』完結が企画された。

それに応えて、町誌編集委員が選出され、昭和五十九年三月、「中巻」が刊行された。引き続き、「下巻」刊行の第一回編集会議が、昭和五十九年三月三十日開催され、執筆分担がそれぞれ決まった。しかし、執筆者の事情もあって、中途変更を余儀なくされ、最終的に、次の執筆者によって原稿が提出された。

下巻

第八章 生活

工業の発展	高橋 寿男
商業の発展	高橋 寿男
衛生	土屋 弘光
消防	土屋 弘光
治安	土屋 弘光
厚生	土屋 弘光・森 義光

第十三章	第十二章	第十一章					第十章											第九章
禁伐林	動植物	文化財	風害	水害	地震	天災地変	伝説	歌謡	俚言	方言	年中行事	葬儀	衣・食・住	民俗	文芸	娯楽	福祉	
三浦久夫	中村浩三・三浦久夫	荒川元暉・山内昭二	土屋弘光	土屋弘光	土屋弘光		杉崎好雄	土屋弘光	土屋弘光	土屋弘光・鈴木孝司	土屋弘光	荒川元暉・杉崎好雄	山内昭二・杉崎好雄		土屋弘光	森義光	土屋弘光	

第十四章 地名

高橋 寿男

第十五章 函南町の将来

土屋 稔 (計画課)

(付) 近代史年表

鈴木 孝司

『函南村誌』が、大正元年発刊されて以来、実に七十三年ぶりの『町誌』刊行である。顧みると、

第一期 (昭和三十八年四月以降)

町制施行を記念して発刊を企画、郷土史家、戸羽山瀚氏を迎えて、町誌編纂に対する助言をいただいた。しかし、執筆委員が、公務の余暇の執筆とあつて、思うように進捗せず、資料蒐集に追われ、昭和四十年、タイプ印刷による中間発表で終わつた。

第二期 (昭和四十一年三月以降)

「中間発表」を基にして、改めて『町誌』発刊が企画された。新委員は、「中間発表」を受け継ぎ、発刊のために執筆分担を決めた。しかし、新資料の発掘、蒐集に追われ多岐亡羊、発刊に至らなかった。

第三期 (昭和四十七年三月以降)

町制十周年記念行事として、『町誌』発刊が再び企画された。新委員によって、第一期、第二期の成果を踏まえ、「上巻」発刊が企画された。すでに蒐集された膨大な資料を、いかに活用するか困難をきわめた。

幸い、すでに提出されていた原稿があり（自然・教育―露木義俊氏、教育・住民―田中悟氏、町の歴史―鈴木勝彦氏、消防・治水―鈴木庫夫氏）、それらを中心にして編集にあたり、鈴木勝彦氏（当時、函南中学校教諭）が不足部分を補筆し、文体統一を土屋弘光が担当、刊行上の庶務を田中悟氏（当時、社会教育委員会事務局長・社教主事）が当たられ、その結果、昭和四十八年三月、「上巻」が刊行された。

第四期（昭和五十八年三月以降）

町制二十周年、記念行事の一環として、『町誌』の完結が企画され、新たに町誌執筆委員が委嘱された。

かくして、昭和五十九年三月、『中巻』が刊行。そして今年昭和六十年三月、『下巻』刊行ということになった。

思えば、中巻から下巻へ、一年という短時日であった。しかも、各執筆委員、それぞれ公務の余暇をさいての執筆であり、その労苦は筆舌に尽くし難いものがあつた。不十分な分野は、大方の御批判、御叱正を賜わり、時を改めて、次の刊行にゆだね、ひとまず「完結」としたい。

なお、特記したいことは、『中巻』発刊寸前に、第六章「行財政」を執筆された杉山弘氏が急逝されたことであり、誠に痛恨の極み、心より御冥福を祈る次第である。

また、中・下巻、それぞれ執筆に際して、既刊の郷土史、並びに関係参考図書等、多数参考にさせていただいた。今それらを一々明記すべきところではあるが、頁数の関係でやむなく割愛させていただいた。深くお詫びすると同時に、心から感謝の意を表したいと思う。

最後に鈴木孝司教育長をはじめ、執筆委員各位、耕文社の天野二郎氏の絶大なる御協力をいただいたことを記して、筆を擱くことにする。

昭和六十年三月二十五日

土屋 弘 光

函 南 町 誌 〔 下 卷 〕

昭和 六十年 三月 二十日 印刷
昭和 六十年 三月 二十五日 発行
〔非売品〕

編 集 函 南 町 誌 編 集 委 員 会

沼津市市場町十二二十四

印 刷 者 (株) 耕 文 社 印 刷 所

代 表 者 長 沢 伯 義

発 行 函 南 町

函南町中央公民館図書室



110208873